

# フランコ・イタリアン武勲詩

## 『シャルルマーニュの遺言』

—試訳—

宮下 拓也・中西 志門（共訳）

### 序

以下に示すのは武勲詩『シャルルマーニュの遺言』（*Testament de Charlemagne*<sup>1</sup>、以下『遺言』）全文の試訳<sup>2</sup>である。

Ariosto の『狂えるオルランド *Orlando furioso*』や Tasso の『解放されたエルサレム

---

<sup>1</sup> 『シャルルマーニュの死』（*Mort Charlemagne*）とも呼ばれる。Pio Rajna と Gianfranco Contini は『死』、Maria Luisa Meneghetti と Madeleine Tyssens は v. 882 に Testamento とあることから『遺言』としている（Gabriele Giannini et Giovanni Palumbo, « 'e li oltre more in çaxant et tu moriras in sedant'. La morte di Carlo Magno nell'epoca romanza », in Ileana Pagani e Francesco Santi (éd.), *Il secolo di Carlo Magno : Istituzioni, letterature e cultura del tempo carolingio*, 2016, p. 54）。いずれも研究者が付けた題で、写本には題名は記されていない。 *Dictionnaire des lettres françaises. Le Moyen Âge* (éd. entièrement revue et mise à jour sous la direction de Geneviève Hasenohr et Michel Zink, Fayard, 1992) では mort、Arlima (*Archives de littérature du Moyen Âge*, <https://www.arlima.net/index.html>) では testement で項目が立てられている。

<sup>2</sup> 翻訳の底本には、*Testamento di Carlo Magno*, Giuseppe Tutino (éd.), Padova, RIALFri, 2021 (<https://www.rialfri.eu/texts/testamentoCarlomagno001> [2022年8月4日最終閲覧]) を使用した。また、Maria Luisa Meneghetti, « Ancora sulla Morte (o Testamento) di Carlo Magno », in Günter Holtus, Henning Krauß et Peter Wunderli (éd.), *Testi, cotesti e contesti del franco-italiano. Atti del 1° simposio franco-italiano (Bad Homburg, 13-16 aprile 1987). In memoriam Alberto Limentani*, Niemeyer, 1989, pp. 245-284、Gianfranco Contini, « La canzone della Mort Charlemagne », in *Mélanges de linguistique romane et de philologie médiévale offerts à M. Maurice Delbouille, professeur à l'Université de Liège*, Éditions J. Duculot, S. A. Gembloux, 1964, vol. 2, pp. 105-126、Gianfranco Contini, « Le début de la Mort Charlemagne », in *La chanson de geste et le mythe carolingien. Mélanges René Louis publiés par ses collègues, ses amis et ses élèves à l'occasion de son 75<sup>e</sup> anniversaire*, Saint-Père-Sous-Vézelay, 1982, vol. 1, pp. 301-311 も参照した。Tutino の現代イタリア語訳も参考にした。

『*Gerusalemme liberata*』を生み出したイタリアの騎士物語の伝統が中世フランスの武勲詩を源流に持つことは知られているが、フランス文学とイタリア文学の結節点である「イタリア人によってフランス語で書かれた武勲詩」は広く紹介されているとは言い難い。しかし、『恋するオルランド *Orlando innamorato*』の注釈において頻繁に参照を指示される *Spagna*（ロンスヴォーまでのスペインでの戦役を語る八行詩節 *ottava rima* で書かれたイタリアの叙事詩）がパドヴァ人作の武勲詩 *Entrée d'Espagne* に多くを負っていることを思えば、無視できない分野であることに異論はないだろう。また、Ariosto の作品においてオルランドが理性を取り戻すために決定的な役割を果たすアストルフォの名が初めて出てくるのもイタリアの武勲詩においてだったことも指摘できる<sup>3</sup>。これらの作品において使われた（作られた）*franco-italien* と呼ばれるイタリア語混じりの古フランス語を混みこなすには苦勞も伴うが、その価値は十分にある。

フランスの文学の流行は早くから北イタリアにまで広がり、イタリア人によって筆写、改作、またオリジナルな創作が行われた<sup>4</sup>。それらの作品におけるイタリア語の要素が混ざったフランス語が *franco-italien* と呼ばれている<sup>5</sup>。*franco-italien* が日常言語としては誰にも用いられなかったことは、英語の影響を受けたフランス語である *anglo-normand* とは事情が異なる点として特記しておく必要があるだろう。この *franco-italien* は中世文学研究の黎明期からすでに関心の対象となっており、その評価も分かれていた<sup>6</sup>。また作品ごとにイタリア語色の濃淡が異なる<sup>7</sup>ため、かつてはそれぞれの作品において別個に文法が記述されるという具合だったが、現在では多くの作品の校訂がなされ、

<sup>3</sup> イタリアへの武勲詩の伝播についての簡潔な紹介として François Suard, *Guide de la chanson de geste et de sa postérité littéraire (XIe-XVe siècle)*, Honoré Champion, pp. 375-384 を参照。

<sup>4</sup> *Grundriss der romanischen Literaturen des Mittelalters*, vol. III *Les épopées romanes*, t. 1/2, fas. 10, Günter Holtus et Peter Wunderli, *Fransco-italien et épopée franco-italienne*, 2005, pp. 37-56。またイタリアでのフランス語使用については Paul Meyer, *De l'expansion de la langue française en Italie pendant le moyen-âge*, Tipografia della R. Accademia di Lincei, 1904 を参照。

<sup>5</sup> 田島宏らは「フランコ・イタリア語」（ヴァルター・フォン・ヴァルトブルク、『フランス語の進化と構造』、白水社、1976年、p. 118）、島崎利夫は「イタリア＝フランス語」と訳している（アンヌ・ロシュブウェ、「13～14世紀のイタリアで書かれたフランス語—人工言語、混成言語、あるいは接触言語？ 若干の事例から—」江川温他共編『東西中世のさまざまな地平—日本とフランスの交差するまなざし—』池泉書館、2020年、pp. 138-156）が、本稿ではあえて日本語にすることはせず *franco-italien* というフランス語をそのまま使うことにする。また *franco-vénitien* や *franco-lombard*、*italo-français* とも呼ばれる。

<sup>6</sup> Marcello Barbato が学説史をまとめている（« Il franco-italiano : storia e teoria », *Medioevo romanzo. Rivista quadrimestrale* 39.1, 2015, pp. 22-51）。François Guessard は « affreuse corruption du langage » と評していた（« Notes sur un manuscrit français de la bibliothèque de S. Marc », *Bibliothèque de l'École de Chartes* 18, 1857, p. 395）。

<sup>7</sup> Cf. Giovan Battista Pellegrini, « Franco-veneto e veneto antico », in *Studi di dialettologia e filologia veneta*, Pacini, 1977, p. 128。

franco-italien 全般に共通する点が明らかになってきており、専用の辞書の編纂も進められている<sup>8</sup>。なお用語の使い方について意見が不一致なところがあり、例えば Zinelli は franco-italien をイタリア人に読まれるためにイタリア人によって書かれた文学作品に限定している<sup>9</sup>。

本稿で訳した『遺言』もいわゆる franco-italien で書かれた武勲詩で、14 世紀北イタリアで作られたと見られており、フランスでは主題になることがなかった「皇帝シャルルマーニュの死」を描いたところに特色がある<sup>10</sup>。アソナンスの 26 詩節、884 行からなる。ロンスヴォーの戦いの 150 年後、シャルルマーニュのもとへ天使が降り、残された時間が少ないことを告げる。皇帝は諸侯を集め遺言を残す。幼年の継嗣ルイの後見をエムリ・ド・ナルボンヌとその息子たちに求めるが、次々に拒絶される。シャルルは嘆くが、折よくギヨームがスペインから帰還し、王子の後見を引き受ける。シャルルが墓室の玉座に座り、天使が魂を連れていくまでが語られる。現存する写本はオックスフォードのボドリアン図書館所蔵の *Canonici it. 56* のみで、この写本はボローニャで 14 世紀に、遅くとも 1337 年に書かれたと見積もられている<sup>11</sup>。15 世紀初頭にイタリアの作家 Andrea da Barberino が *Narbonnais* を翻案した *Storie Nerbonesi* にはフランスの武勲詩にはなかったナミエーリ (Namieri=エムリ Aymeri) と息子たちの一騎打ちのシーンがあるが、『遺言』にもエムリと息子たちの戦いへの言及があることから、イタリア語の翻案作品とフランスの武勲詩の伝統をつなぐものと見られている<sup>12</sup>。ギヨームがルイの摂政になる点も Andrea を先取りしている。Günter Holtus がこの作品を「混成文語 langue

<sup>8</sup> Repertorio informatizzato antica letteratura franco-italiana (<https://www.rialfri.eu/rialfriWP/>) で *Dizionario del Franco-Italiano (DiFrI)* が未完成だが閲覧できる。

<sup>9</sup> Fabio Zinelli, « Espace franco-italiens : les italianismes du français-médiéval », in Matrin Glessgen et David Trotter (éd.), *La régionalité lexicale du français médiéval au Moyen Âge*, Éditions de linguistique et de philologie, 2016, p. 239. 一方 Segre は franco-italiano (franco-italien) の語は他の地域でイタリア人によって書かれた北イタリアの特徴が混ざっていないものを指すのに使い、franco-veneto (franco-venétien) の語を北イタリアの混成言語を指すのに使うことを提唱している (Cesare Segre, « La letteratura franco-veneta », in *Storia della letteratura italiana*, vol. 1, *Dalle origini a Dante*, Enrico Malato (dir.), 1995, p.644.)。

<sup>10</sup> Holtus et Wunderli, *op. cit.*, pp. 195-196. *Le Couronnement de Louis* (ms. D, vv. 279-282) と *Anseïs de Carthage* (Johann Alton (éd.), Litterarischer Verein in Stuttgart, 1892, vv. 11600-11603) は皇帝が死去したことに言及しているが、一般的にはいつの間にか代替わりが完了している。武勲詩におけるこの沈黙の意味については、Jean Subrenat, « Sur la mort de l'empereur Charles », in *Charlemagne et l'épopée romaine. Actes du VIIe Congrès International de la Société Rencesvals. Liège, 25 août - 4 septembre 1976*, Madeleine Tyssens et Claude Thiry (éd.), Les Belles Lettres, 1978, t. 1, pp. 205-213 を参照。

<sup>11</sup> Meneghetti, *op. cit.*, p. 257. RIALFrI のサイトの Tutino による « Testo » の項、Giannini et Palumbo, *op. cit.*, pp. 54-55 も参照。

<sup>12</sup> Madeleine Tyssens, « Poèmes franco-italiens et *Storie Nerbonesi*. Recherches sur les sources d'Andrea da Barberino », in *Testi, costesi e contesti*, pp. 307-324.

mixte littéraire の理想的な実例」と評しているとおおり<sup>13</sup>、言語的にも興味深いものである。多くの武勲詩と同様に、本作品も構文や物語の筋はシンプルであり、単語を同定することさえできれば、筋を追うことはそこまで難しくない。情景のイメージや単語の意味の連想を意識的に行うことを常に強いる Dante や中世ドイツの詩人 Wolfram von Eschenbach などよりは遥かに読みやすいと言えよう。この『遺言』自体は 1000 行に満たず、コミカルなシーンも、一騎打ちも、姫君とのロマンスもないが、諸所で言及される名前から、荷車を進ませるのに悪戦苦闘するベルトランとそれを見て笑うギヨーム<sup>14</sup>、無謀な誓いをするヴィヴィアン<sup>15</sup>など、武勲詩の各場面を思い起こさずにはいられない。

本作にはイタリア語、ヴェネト語的特徴とフランス語的特徴、franco-italien 独自の特徴が混在して現れる。一見したところ、語が -o、-a で終わるなどイタリア語色の方が強い印象があり、古フランス語の二格体系はほとんど機能していない。動詞の活用形もイタリア語方言形とフランス語形が見られる。例えばトスカーナ方言では -ggio となった形式 (cf. *aggio*, *veggio*) に対応する *aço* (= *ho*, vv. 356, 406, 437) や *veço* (= *vedo*, vv. 287, 529, 539, 817) のようにラテン語の -io, -eo からヨッド化 (>/j/) したヴェネツィア語形<sup>16</sup>と並んで、*ay* (= *ai*, vv. 196, 480, 608, 611, 643, 644, 816) のようなフランス語形も用いられている。活用が判然としなく文脈によらねばならない箇所も散見される。また、ゲルマン語の語頭の /\*w/ はフランス語やイタリア語では /gw/ として借用されるが、それと並んで *vere/vera* ‘guerre’ (vv. 109, 309, 678 < fik. \*werra cf. *Französisches etymologisches Wörterbuch*/FEW, 17, p.567a) や *vardar* ‘guarder’ (vv. 442, 471, 487 < \*wardôn cf. FEW, 17, p.510a、しかし、*gardar* v.444 も用いられる)、*visse* ‘guise’ (v.289 < \*wisa) のように /w/ >/v/ となるヴェネト語の特徴も見られる。ただし、北イタリアに広く見られる特徴としては *tegnir* (= *tenere* vv. 76, 146, 162, 164, 170, 193, 369, 432, 503)、*vegnir* (= *venire* vv. 117, 121, 127, 365, 424, 661, 768) のような語幹子音の口蓋化が挙げられる<sup>17</sup>。一方、同じく franco-italien の作品である *Aquilon de Bavière* でも *vegnir* や *tegnir* は頻出するが、Wunderli はこれを古フランス語の接続法に由来する形と説明している<sup>18</sup>。その他のヴェネト的特

<sup>13</sup> Holtus et Wunderli, *op. cit.*, p. 196. また «L'exemple parfait» とも (Günter Holtus, «Plan- und Kunstsprachen auf romanischer Basis IV. Franco-Italienisch», in Günter Holtus, Michael Metzeltin et Christian Schmitt (éd.), *Lexikon der romanistischen Linguistik*, B. VII. *Kontakt, Migration und Kunstsprachen*, part I, Niemeyer, 1998, p. 746)。

<sup>14</sup> *Charroi de Nîmes*, vv. 982-1015 (éd. Duncan McMillan, Klincksieck, 1972)。

<sup>15</sup> *Chevalerie Vivien*, vv. 12-42 (éd. Duncan McMillan, t. 1, Centre universitaire d'étude et de recherche médiévale d'Aix, 1997)。

<sup>16</sup> Gerhard Rohlfs, *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*, vol. 1 Salvatore Persichino (tr.), *Fonetica*, vol. 2, Temistocle Franceschi (tr.) *Morfologia*, vol. 3, T. Franceschi et Maria Caciagli Fancelli (tr.), *Sintassi e formazione di parole*, Einaudi, 1966-1968, vol. 2, §534。

<sup>17</sup> Rohlfs, *op. cit.*, vol. 2, §617。

<sup>18</sup> *Aquilon de Bavière*, Peter Wunderli (éd.), vol. 3, Niemeyer, 2003, pp. 180-181。

徴としては v. 292 と v. 567 に見られる *xe* (*essere* pres. 3. sg) も挙げられる<sup>19</sup>。Rohlf's によるとこの *x* の実際の音価は *ś* (*/z/*) なのか *ž* (*/ʒ/*) なのかははっきりとはわからないものの、このような表記はイタリア北部に見られ v. 82 の *plaxe* (*piacere* pres. 3. sg) のような語形はミラノ方言にも例証されている<sup>20</sup>。franco-italien 独自の特徴として本作で顕著なものは、ジョングルールを表す *çublier* (v. 171) という語だろう。詳細は注で解説するが、フランス語、イタリア諸方言のいずれにも見られない、この混成語の独自性が垣間見える。

基本的に直訳を選んでいるため、読みやすい日本語にはなっていないが、franco-italien の言語と文学の紹介を目的にしたものとして、了解していただきたい。

## 訳

### I

36 の王国全てから貢物が贈られる、  
 シャルルが彼の甥ロランとともに征服した国々から。  
 ロンスヴォーで彼に大きな損害が起こった  
 多くの優れた戦士たちを失った日に。  
 ランスのチュルパンとオリヴィエとロラン、 5  
 十二勇士と 20501 人の戦士たちを(失ったのだ)。  
 それから 150 年シャルルは生きた  
 その間彼は嘆かない日を知らなかった。  
 シャルルはミル・マルトル<sup>21</sup>にいた、我らの優れた皇帝は。  
 諸侯たちとの間である約束をした。 10  
 4 月の終わりの 5 日前に  
 王は最初のみさが歌われるときに行くと  
 プロヴァンスのサン・ジルの教会へ。  
 彼は聖体を見て、それに敬意を示し  
 神に彼の甥ロランのために祈った。 15  
 右に聖天使が降りた、  
 天使ケルビム<sup>22</sup>と聖ミカエルも

<sup>19</sup> Rohlf's, *op. cit.*, vol. 1, §214.

<sup>20</sup> Cf. Rohlf's, *op. cit.*, vol. 2, §540.

<sup>21</sup> Contini (« La canzone... », p. 109) は Mille Martre とは Martre Tolosane (トゥールーズ近郊、オートガロンヌ県のコミューン) のことであると特定している。Cf. Comagliotti, « Problemi testuali della *Mort Charlemagne* », in *Testi, cotesti e contesti*, p. 177.

<sup>22</sup> Contini が Bédier の『ロランの歌』(以後 *Roland*) の注釈 (*La Chanson de Roland commenté par*

そしてシャルルの白い手を取り  
 言った、「王よ、我が望みを聞け。  
 イエスがこう言うことを命じ、私はそれを言っているのだ<sup>23</sup>。 20  
 お前はとて大きな罪<sup>24</sup>を自らのうちに持っており  
 それを 60 年以上持ち続けてきた。  
 それを誰にも決して言うことはなかった。  
 それゆえプロヴァンスのサン・ジルの元へ行くのだ。  
 そしてそれや別のことを改悛するのだ。 25  
 お前は今月と来月と  
 5 日を超えて生きることはできない。  
 お前は来たる木曜や金曜<sup>25</sup>には死なないだろう  
 それに続く聖日曜日にも  
 そして月曜は聖ヨハネの日であり 30  
 そして次の日は大ローマの聖ペトロの日である。  
 神がかくも愛する土曜<sup>26</sup>に、  
 三時課のときにお前は死ぬことだろう<sup>27</sup>。

Joseph Bédier, Piazza, 1927) に言及しているように、ロランの臨終の際にもケルビムが登場する。これについての Bédier のコメントは « *surprenant et mystérieux* » (p. 312)。Roland の同じ箇所 (v. 2393) への Jenkins の注を見るとラファエルのこととみなす (ガブリエル、ミカエルとともにトリアドをなす) 意見もあったことがわかる (Atkinson Jenkins (éd.), *La Chanson de Roland, Oxford version, revised edition*, D.C.Heath Company, 1924, p. 174) が、ケルビムは他の作品にも現れるため (注 106 参照)、そう捉える必然性はないと思われる。

<sup>23</sup> *tel manda a dire e io tel sum digant* tel=(fr.) tel < TALIS と解釈した。Tutino のように tel を (it.) *te lo* の縮約と考えて「あなたにこのことを言うよう命じ」と訳すことも可能か。

<sup>24</sup> ロランがシャルルマーニュと妹との近親相姦の子であるという伝説があり (Gaston Paris, *Histoire poétique de Charlemagne*, A. Frank, 1865, p. 381)、オック語版 Roland の作者は、シャルルマーニュの口に、ロランが妹と自分の罪によって生まれた子である、と言わせている (Ronsasvals, Beatrice Solla (éd.), Carocci editore, 2018, vv. 1624-1627)。しかし、ロンスヴォーの戦いを 150 年前としているため 60 年とは数字が大きく異なる。Contini, « *Le début...* », *op. cit.*, p. 309 も参照。だが、それを差し置いて指摘すべきシャルルマーニュの罪を我々は知らない。

<sup>25</sup> 原文 *gobia, venere* = jeudi, vendredi, it. *giovedì, venerdì* (JOVIS-DIES, VENERIS (< VENERUS)-DIEM). Cf. Rohlf, *op. cit.*, vol. 2, §346. Cf. esp. *jueve, viernes*

<sup>26</sup> キリストの命日。Cornagliotti, *op. cit.*, p. 178, n. 5.

<sup>27</sup> 原文 *tranbasante* Contini と Meneghetti は *trapasante* と修正しているが、Tutino は写本の読みを保存し fr. *transpasser* の « *una forma francoitaliana* » と説明している。ところで v. 642 の *trapasant* にも Tutino は注をつけて、「Cornagliotti は '*oppresso dall'angoscia, agonizzante*' の意味で読む方が良いと考えていて、この解釈を *lectio difficilior* と見做している」と記しているが、Tutino は誤解しているように思われる。我々の理解では、Cornagliotti は v. 33 の *tranbasante* は古イタリア語の

お前のためにとても大きな奇跡が起こるだろう。  
 太陽が昇り沈む世界中で、35  
 諸国や地上全てで  
 全ての鐘が音を鳴らすだろう  
 1000 の鐘がひとりでに鳴るだろう<sup>28</sup>。  
 我々天使ケルビムの 9 人の仲間は  
 お前のために 5 日後に訪れるであろう 40  
 そしてお前の魂を(天の)教会<sup>29</sup>へと連れていこう。  
 お前の最期が訪れるとき、  
 啞の者が言葉を得、聾の者が聞こえるようになるだろう。  
 真の改悛にあるものは、  
 もし祈れば、神は聞き届けてくれる。」 45  
 シャルルはその知らせを聞き、返答することを重大なことと思  
 それまででないほどの大きな恐れを抱いた。  
 ミサから離れて、フランスに帰り、  
 彼の諸侯を集めた。  
 今やこのように話し始め、優美に言った、 50  
 「バロンよ、」シャルルは言う、「落ち着いて聞け。  
 私のためにフランスの勇士から 1 人を選び出せ  
 高貴な騎士か伯か将で  
 わが王国を維持し守ることができるような者を。  
 私はあなた方に最も高く重大な知らせを言おうと思う。 55

---

‘*tranbachiare*’ (= *oppresso dall’angoscia*)としてそのまま読めるから修正を加える必要はないと主張しており、*tranbasante* (v. 33)と *trapasant* (v. 642)とでは前者の方がより優れた「読み」としている。が、作品の終わりに語られるシャルルマーニュの死は穏やかそのもので、一抹の苦しみも現れていないため、ここでは「苦しみ」の語を避けて訳出した。

<sup>28</sup> *Couronnement de Louis* の D 写本ではシャルルの死に際して鐘がひとりでに鳴ったことが語られ、David Hoggan はこの作品との関係を論じている (『遺言』が原型であった可能性は否定される。« La version abrégée du *Couronnement de Louis* a-t-elle connu une grande diffusion ? », in Wolfgang von Emden et Phillip Benett (éd.), *Guillaume d’Orange and the Chanson de geste. Essays presented to Duncan McMillan in celebration of his seventieth birthday by his friends and colleagues of the Société Rencesvals*, Reading, 1984, pp. 55-66)。

<sup>29</sup> 原文 *che portaremo toa anima in glexia*; Cornagliotti (*op. cit.*, p. 193) はアソナンスが合わないことから語順を入れ替えることを注で提案しており、Contini (« Le debut... » *op. cit.*, p. 305) も同様の提案を行なっていると同時に、*glexia* (= *église*) を *gloria* と直している (*portaremo in gloria toa anima*)。これに対して、Tutino は *glexia* という語形は北イタリアに広く見られるものであるため、この修正は不要であるとしている。

あなた方は私を主君として持つことはないだろう、今月と来月と  
 2日の過ぎた5日後(3日後)には。  
 土曜の日、神がとても愛する日に、  
 私は三時課が過ぎるときに死ぬだろう。  
 私のためにとても大きな奇跡が起こるだろう。」 60  
 フランス人たちはフランスの王が言う知らせを聞き、  
 あらん限りの声で叫ぶ、「我らの裕福な王よ、  
 神の愛にかけて、私たちを<sup>30</sup>見捨てないでください！  
 誰がこれからフランス王国を守ると言うのですか？  
 王冠をあなたは300年以上戴いてきました。 65  
 まだそれを持っていてください、もしそれが神と彼の聖人たちの御心にかなうのなら、  
 決して色がより美しく、より優美になることがないとしても。  
 もし神の心にかなうのならあなたはまだ生きることができるでしょう」  
 「バロンよ」シャルルは言う、「あなた方の言うことは正しい、我が民よ。  
 私は<sup>31</sup>たしかに王冠を持ってきた、あなた方が言っているように。 70  
 より美しくより優美であったことはなかった。  
 三つのことだけ私は残念に思うだろう。  
 私が子供だった頃のように走ったり跳んだりすることや、  
 鋭い杭と重い石を引くことができないことを。  
 そして私が私の高貴な夫人とともに寝室にいて 75  
 白い絹の中で彼女を腕に抱いたときに、  
 私は私が子供だった時ほどには喜びを得ない。  
 しかし他の全てのことについては自分が有能であるのを見るだろう。  
 剣と槍でよく戦い  
 戦場では我が勇敢な人々を率いることができ、 80  
 大いなる必要に際しては勝利し戦うことができる。  
 もし神の心にかなうのであれば、まだ生きることができだろう、  
 しかしそれはできないのだ、そう天使が私に言ったのだから。

## II

フランス人たちはすぐにその話を聞いた、

<sup>30</sup> 原文 *non n'als abandonant!* *n'* = *ne* < *nos* (= it. mod. *ci*) 一人称複数対格。 Cf. *voi: vi, tu: ti*. 音韻論的に期待される形は *nu* であり、*ne* になる理由は十分に説明されていない (Rohlf's, *op. cit.*, vol. 2, §460)。また Pierre Bec, *Manuel pratique de philologie romane*, t. 1, pp. 171-172.

<sup>31</sup> 原文 *e' = eo* (it. *io*) < lat. *EGŌ* (v. Rohlf's, *op. cit.*, vol. 2, §434).



ピピンの息子シャルルの(話を)、それは彼らには喜ばしくはなかった。 85  
 そして彼は証文と書簡、文書を破らせ<sup>32</sup>  
 そして都城、まち、城塞中に  
 塔、谷、川や土地中に使いを送った。  
 騎士たちはどれほど指を捻ったことか<sup>33</sup>！  
 彼らは茶色と黒のマントを纏った。 90  
 そして貴婦人や他の少女たちは  
 服を変えて部屋へ入り、  
 三つ編みを周りに結び、  
 胸を打ち歯を打ち合わせ  
 みぞおち<sup>34</sup>の前で胸を打ち 95  
 自らを可哀想な哀れな人と呼ぶ、  
 なぜならかつてあり得た<sup>35</sup>  
 最良の王を、最も賢く立派な王を失うのだから。  
 アンセイス・ド・ボルドー<sup>36</sup>が立ち上がった、  
 弁舌爽やかなアンジェリエ<sup>37</sup>の息子が 100  
 そしてシャルルにある奇妙なことを言った  
 「最期へ赴くときどこにいたいですか？  
 フランスにいたいですか、それとも美しいパリに？」  
 「確かに<sup>38</sup>」王は言った、「アーヘン<sup>39</sup>に

<sup>32</sup> Tutino が注で文献一覧に示さないまま引用している« Stussi 1965 »はおそらく Alfredo Stussi (éd.), *Testi veneziani del Duecento e dei prima del Trecento*, Nistri-Lischi, 1965。同じく出典が記されていない« Rezasco 1881 »は Giulio Rezasco, *Dizionario del linguaggio italiano storico ed amministrativo*, Le Monnier, 1881。それらによると、文書を破ることは「証文の無効化」を意味する。

<sup>33</sup> 原文 *detorge lor dielle dielle* < \*DIGITELLAS (Cornagliotti, *op. cit.*, pp. 182-183) cf. DIGITUS. *Tordre ses mains/poings* のヴァリエントで悲嘆を表すジュスチャー。続く詩行の「胸を打つ」なども同様、cf. « Grant duel demainent ; maint pis i ot batu, / Maing poing destors et maint cevel rompu ; » (*Anseis de Cartage*, vv. 3823-3824)

<sup>34</sup> Tutino は *Tesoro della lingua italiana delle origini* (TLIO, <http://tlio.oivi.cnr.it/TLIO/>) を引いて「鎖骨」と訳しているが、「みぞおち」という意味も確認できる。後者の意味で訳した。

<sup>35</sup> 原文 *che may fost né deça essere*。

<sup>36</sup> アンセイス、アンジェリエの息子。André Moisan, *Répertoire des noms propres de personnes et de lieux cités dans les chansons de geste françaises et les œuvres étrangères dérivées*, 2 t., 5 vol., Droz, 1986, t. 1, vol. 2, p. 885, Savari 54 (de Toulouse, Anseis)。

<sup>37</sup> アンジェリエ・ド・ガスコーニュ、シャルルマーニュの十二勇士の1人、ロンスヴォーで戦死。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, pp. 370-371, Engelier 14。

<sup>38</sup> 原文 *Voyre* fr. *voire* (adv.) と解釈したが、it. *vorrei* (cond. de *volere* ‘vouloir’) とも読めるか。

<sup>39</sup> フランス名エクス・ラ・シャペル (現ドイツ)、シャルルマーニュが好んで滞在した土地のひ

聖シヴィエ<sup>40</sup>の部屋と礼拝堂がある教会に。 105  
豪華な碑を私のために地下に作らせよ、  
貴石とサファイアと寶石で。  
私の元へ伯たちが外国の地からくるだろう。  
サラセン人を征服するために彼らはより大きな戦争をするだろう。

### III

「バロンよ、」シャルルは言った、「高貴で勇敢な騎士たちよ、 110  
ドン・シモン・オブリ<sup>41</sup>を前に来させよ  
それからロランが死んだ時から  
私に仕えてきた礼拝堂付き司祭も」  
そして彼らはすぐにやってきた。  
彼らは 200 以上の証文に印を押す 115  
そして王国中に使者を送る。  
「アーヘンにキリスト教徒は来ること  
勇猛なる皇帝のもとで盛大な宮廷を催すために、  
彼らの生きている間そこで宮廷を催すことはもうないだろうから。  
王は来たる聖ペトロの日に死ぬ。 120  
ローマから教皇は来ること  
枢機卿と司教と黒と白の修道士<sup>42</sup>も、  
アンティオキアからは立派な総大司教が、  
ブザンソンから大修道院長、ランスから司教が。」  
こうして栄えある集会で一緒になった。 125  
アーヘンへすぐに来ないような  
領主も軍の長も立派な人もいなかった、  
彼らは外に平野に城壁沿いに宿営した。  
豪華な宴をキリスト教徒は催した  
王が自分の終わりに近づいているゆえである<sup>43</sup>。 130

とつ。

<sup>40</sup> シルヴェストル1世? 原文 *Sen Syvier*、イタリア語訳 *San Syvier*。Moisan になし。

<sup>41</sup> シモン・オベリ、ブルゴーニュ公、バイエルン王。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 182, Auberi 10.

<sup>42</sup> 黒の修道士=ベネディクト会士、白の修道士=シトー会士。

<sup>43</sup> 原文 *cha li roys s'aprosima a le soy finemant*。以下「終わりが/死が近い」という表現は全てシャルルマーニュの発言の中で繰り返される (vv. 132, 134, 288, 307, 529, 539, 817)。Roland で «Ço sent Rolland que la mort li est pres» (「ロランは死が近いのを感じる」, version O, éd. Ian Short in *La Chanson de Roland/The Song of Roland. The French Corpus*, Joseph J. Duggan (éd.), Brepols, 2005, vol. 1, Part 1, v.

IV

- 「バロンよ、」とシャルルは言った、「高貴な騎士たちよ、  
その時が来る<sup>44</sup>、その日が近づいている。」
- 「バロンよ、」とシャルルは言った、「高貴な騎士たちよ聞け。  
あなた方には私が終わりに近づいているのが見えるだろう  
そして私は遺言を行いたいので、それを書き留めてくれ。 135
- 『プロヴァンスのサン・ジル、オブリ殿』
- 「まず神とその聖人たちについてしようと思う、  
なぜなら理性がそれを命じて言うから。  
アーヘンの街の半分、城市と船を  
このいとも聖なる修道院に残す、そして聖ドニ 140  
と聖十字架の一部をオルラン<sup>45</sup>の中  
聖クインティヌス<sup>46</sup>の谷と城  
と小麦粉を作る風車の後ろを、  
私の体がそこに横たわるために。  
さらに私の財産から1万枚の金貨<sup>47</sup>を 145  
100人の司祭と100人の修道士が持てるように  
私の魂のために何度もミサや朝課を歌う司祭たちに(金貨を)、  
神が私の魂を聖なる楽園に迎えてくれるように。」
- 「バロンよ、」とシャルルは言った、「高貴な騎士たちよ、  
フランスとパリそれから 150

2259. 以下 *Roland* への言及は基本的に *French Corpus* を参照している) が表現を変えて 168-176 詩節で繰り返されるのが想起される。

<sup>44</sup> 原文 *vayse* = *vai se* (再起)? \**ABANTIARE* ‘*portare avanti*’ > *avanzare* の古ピエモンテ方言での活用形として *vayse* が確認されている (*Lessico etimologico italiano* (LEI), Max Pfister et al. (éd.), 1979-, I, 33) がこちらで読むべきだろうか。

<sup>45</sup> 原文 *Orlin* オルレアン? エプロ川流域? *Moisan, op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 1306. *Moisan* は *MC (Mort Charlemagne)* に出てくるとは記していない。 *Aquillon de Bavière* には «*Orlin, che ore se clame Millan*» という記述がある (éd. Wunderli, vol. 2, 1982, p. 456、また vol. 3, pp. 27-31 も参照) が、ここも、イタリアのミラノのことと解釈するのは地理的に難しいか。

<sup>46</sup> 聖クインティヌス、3世紀にヴェルマンで殉教。

<sup>47</sup> 原文 *marabuty* *Tutino* が注で文献一覧に載せずに *Boerio 1867* とだけ引用しているのは *Dizionario del dialetto veneziano*, Giovanni Cecchini Edit. のこと。 *Boerio* によると *marabuto* は「強風のもとで用いられるガレー船の帆」であるが、*Tutino* が文献一覧には載せずに *Martinori* (Edoardo Martinori, *La moneta: vocabolario generale*, Istituto italiano di numismatica, 1915, p. 266a) を引用して確認している通り、ここではムラービト朝のディナール金貨を指す。

思いつくところの<sup>48</sup>キリスト教国の司祭と修道士  
 各人に私は 100 枚の金貨を遺贈しよう、  
 私の魂のために何度もミサや朝課を歌うであろう司祭たちに、  
 神が私の魂を聖なる樂園に迎え入れてくれるように。」  
 「バロンよ、」シャルルは言った、「シモン・オブリ殿 155  
 とユーグ・ド・プロヴァンス<sup>49</sup>とサン・ジルのバロンよ、  
 私が短い言葉で言ったそれを書き留めてくれ  
 さらにラテン語に私が言ったことがなるように  
 誰もそれを(私の)意に反して増やしたりできないように。  
 まださらに私は言い始めようと思う。 160  
 祝福された聖シヴェルの聖堂付きの全ての司祭が  
 与えたり取っておいたりするためのものを私からたくさん受け取り、  
 修道院が大きくなり維持されるように、  
 そして 100 人の司祭を持つことができ、またそうであるべきように、  
 私の魂のためにミサと朝課を歌う人たちを、 165  
 神が私の魂を聖なる樂園に迎え入れてくれるように。  
 そしてあなた、教皇様、私のために命じてください  
 祝福された聖シヴェルの全ての修道院長<sup>50</sup>が  
 私の遺言を認めて  
 その家に持っていき保管するようにと。 170  
 そして私について歌い語ろうとするジョングルール<sup>51</sup>が

<sup>48</sup> 原文 *là o' l serrà d' avys* Tutino はフランス語の *être d' avis que* のことと知っているが、イタリア語訳では *si riterrà [opportuno]* としている。

<sup>49</sup> ジョズラン・ド・プロヴァンス、伯、ネームの仲間。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 620, Jozeran 36, p. 636, n. 8.

<sup>50</sup> 将来の代々の修道院長のこと (Meneghetti, *op. cit.*, p. 244)。

<sup>51</sup> 原文 *çublier* = *jongleur* < JOCULARIS/JOCULARI. 語中に -bl- を持つ語形はガロ・ロマンス語にもイタリア語にも見られず、Rajna がこれを *it. giubilo* (歓喜) の影響下で誤った語源をもとに作られた形であるとしている («Frammenti di redazioni italiane del Buovo d'Antona», *Zeitschrift für romanischen Philologie*, 11, Max Niemeyer, 1887, p. 180, n. 367) ことを根拠に、Holtus et Wunderli (*op. cit.*, p. 70) はこれをフランコ・イタリアンの典型的例であるとしている。また、Capusso はこの語を «*esempi(o) di formazioni arbitrarie*» としている («La produzione franco-italiana dei secoli XIII e XIV : convergenze letterarie e linguistiche», in Renato Oniga, Sergio Vatteroni et Soveria Mannelli (éd.), *Plurilinguismo letterario, Atti del Convegno internazionale, Udine, 9-10 novembre, 2006*, Rubbettino, 2007, p. 182) が、Pellegrini によると多くのフランス語とイタリア語のハイブリッドが気まぐれに行われるのに対し、-bl- を含む語形への変化は一貫して行われる (Pellegrini, *op. cit.*, p. 128) ため、恣意的なものというよりは *franco-italien* の特徴と言えるのではないだろうか。Zinelli は «*le mot franco-italien par excellence*» と呼んでさえいる (*op. cit.*, p. 243)。

褒美をそこでその修道院長から得るようにと。」  
 教皇は言った、「陛下、今それを書きました。  
 『彼が修道院のものから 2 人分を自分のものとして持つべし』と、  
 それによって彼は自分のお供に従者や馬を持つでしょう。 175  
 『彼がその遺言を歌い語る限りにおいて  
 修道院から食糧を得るべし』と。  
 『彼が修道院を後にしようというときには  
 修道院長は彼に与えなければならない  
 自分の持ち物から多くを、彼(ジョングルール)が不足なく行けるように。』 180  
 「バロンよ、」シャルルは言った、「神があなた方を助けてくれますように、  
 イエス・キリストから褒美を得るべきなのだから  
 私を歌い語ろうとするであろう者は。」  
 すると教皇は言った、「今それを書き留めました。  
 『15 日間自分の支払いを得ることができるべし 185  
 それを聞こうとする 10 人のそれぞれも。』  
 「殿、」とシャルルに教皇は言った、「あなたはそこから見返りを得るでしょう  
 そしてフランスの地もあなたに仕えるでしょう  
 そしてあなたを讃え支えるでしょう、  
 自分のもの全てを善のために放棄しなければなりません、 190  
 あなたがそれを命じる時はいつでも。  
 我が主のほかからはあなたはそれを得ないでしょう。  
 もしあなたの何らかの誤りで支えと  
 あなたが持つべきだった私の全ての富を失うのであれば。」

V

「バロンよ、」シャルルが言った、「高貴な勇敢なる騎士たちよ、 195  
 私は神と聖人たちに遺言を行った。  
 今度は私は土地を息子や子供たちの間で分けようと思う。  
 そなた、ロテール<sup>52</sup>よ、他よりも年上のあなたは、  
 冠を取って、ドイツへ行け。

<sup>52</sup> 原文 *sire Lohier* 写本・Meneghetti (*op. cit.*, p. 262) は Looy/Leoy. Tutino は Paolo Rinoldi の修正案 («Nota al v. 198 della «Morte di Carlomagno»», *Medioevo e Rinascimento* 11, 2000, pp. 111-118) を採用して Lohier と直している。Rinoldi は人名の省略表記が誤解の原因と推測している。Cornagliotti は Sire Leoy を Sire Elys と読むことを提案していた (Cornagliotti, *op. cit.*, p. 186)。ロテールはシャルルマーニュの息子、Moisan, *op. cit.*, p. 648, Lohier 1.

7つの大きな王国をあなたに贈ろう、200  
 そこではあなたに 40000 の戦士が仕えるだろう、  
 そしてもしお前が息子や子供がないまま死んだら  
 その土地についてはお前の好きなようにしなさい。  
 なぜなら私はドイツの諸侯をよく知っている、  
 彼ら<sup>53</sup>は生きている間フランス人を愛することはない。205  
 お前が生きている間はルイ<sup>54</sup>を助ける。  
 ルイには私は 35 の王国を残す、  
 そこでは 100000 の戦士が彼に仕えるだろう。  
 そしてイザベラ<sup>55</sup>には私は大ガスコーニュを残す。  
 そこでは 100000 の戦士が彼女に仕えるだろう。210  
 もし彼女が息子や子供がないまま死んだら  
 その土地をベルナール・ド・ブルバンに渡そう、  
 エムリの腹から落ちた彼の息子である人に。  
 アルーナ<sup>56</sup>には私はブルゴーニュと財産を残そう、  
 そこでは彼女に 10000 の戦士が仕えるだろう、215  
 そしてそこで彼女は全く思いのままに夫を得るだろう  
 そしてもし彼女が息子や子供がないまま死んだら、  
 この土地は前に挙げたルイに残そう。  
 ベルタ<sup>57</sup>には私はロンバルディアの地を残そう  
 そしてマルカ・マローサ<sup>58</sup>とドイツの地を。220  
 それによって彼女は証文によってオットー王<sup>59</sup>のものだった、  
 もし彼女が息子や子供がなく死んだら  
 その土地について望み通りになされるように、  
 なぜなら私はロンバルド人が抜け目ないことをよく知っているのだから。  
 彼らはどんな人から支配されるのも望まないのだ。」225

<sup>53</sup> マガンツァ家のこと。

<sup>54</sup> ルイ、シャルルマーニュの息子。敬虔王ルイ（ルートヴィヒ）。現実にはシャルルマーニュの死の時点で成人していた。

<sup>55</sup> イザベラ、シャルルマーニュの娘。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 969, Ysabel 7.

<sup>56</sup> アヴィス、シャルルマーニュの娘。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 190, Avis(s)e 3.

<sup>57</sup> ベルト、シャルルマーニュの妹、ロランの母。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol.2, p. 241, Berte 2.

<sup>58</sup> トレヴィーゾの地名 (Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 1274)。Tutino は Morlino 2016 を引き合いに出しているが、未確認。

<sup>59</sup> オットー、ロンバルディアの王、シャルルマーニュの盟友。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 760, Otes 56 (de Pavie)。

VI

「バロンよ、」シャルルは言った、「勇敢で高貴な騎士たちよ、  
 ジュリアン・ド・サン＝ジル<sup>60</sup>のことは知っているか？  
 私の宮廷に来て、私に仕え、  
 その後私から全く利益を得ずに  
 20000 人の戦士とともに死んだ者のことだが。 230  
 彼はエリー<sup>61</sup>という名の子供を残した。  
 父親が死んだ時彼は小さな子供だった。  
 彼の父が死んだときには一歳だったが、  
 私の食卓で私に給仕している。  
 夜も昼も私の部屋にいて 235  
 戦場では私のハンガリー産の馬を引いていて  
 私の槍と花が描かれた盾をもっていて、  
 私に彼の礼節でもってよく仕えたので、  
 私が彼を騎士にし、剣を佩かせた。  
 オリフラム<sup>62</sup>を私は彼に任せた。 240  
 20 年間彼は私の家臣の導き手であった、  
 私は彼の騎士ぶりのゆえに何も失わなかった。  
 私は彼に贈り物を約束したのだ、私が彼に約束を違えるとは思ってくれるな。  
 妻として彼に我が娘アルーナを与えるつもりだ。  
 彼を私の元へ来させよ、マリアの息子である神にかけて、 245  
 そうすれば私の娘はすぐに妻となるだろう。」  
 マケール・ド・ローザンヌ<sup>63</sup>は彼に大きな嫉妬を抱いた。

VII

マケール・ド・ローザンヌは立ち上がった<sup>64</sup>。

<sup>60</sup> ジュリアン・ド・サン＝ジル、サン＝ジルの伯。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 633, Julien 6.

<sup>61</sup> エリー・ド・サン＝ジル、ジュリアンの息子。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 365, Elie 43.

<sup>62</sup> サン・ドニの、そしてフランス王家の旗印 (cf. Jean Favier, *Dictionnaire de la moi médiévale*, Fayart, 1993, p. 707)。

<sup>63</sup> マケール (マカーリオ)・ド・ローザンヌ、マイヤンス (マガンツァ) の一族。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 660, Macaire 5.

<sup>64</sup> 原文 *se lieva in n'estant* Tutino は *si alzò immediatamente* または *all'istante* (v.752) 'tout de suite' と訳しているが、ここでは *se leve en estant* と解釈した。

「シャルルよ、」彼は言った、「あなたは冗談を言っているのですか<sup>65</sup>？  
 しっかりとあなたは神と聖人たちに遺言をし  
 250 土地を息子たちと子供達の間で分けました。  
 小さなアルーナに関しては、他よりも悪い状況に置かれています、  
 あなたは彼女を所領を持たないような男に与えました。  
 彼は1アルパンの土地すら持っていないのですぞ<sup>66</sup>。  
 255 なぜ彼女を伯か将に与えないのですか  
 大きな所領を持つ高貴な人に？  
 もしあなたが私に彼女をくれようというのなら、高貴な王よ、私が受け取りましょう。  
 私は彼女を、私をととても愛してくれている我が息子、ベランジェ<sup>67</sup>に与えましょう。  
 彼は友や親族に富んだ男で<sup>68</sup>  
 260 金や金貨で裕福である。  
 2人とも20歳を過ぎたくらいで若く  
 心と想いから互いに愛し合うでしょう。」<sup>69</sup>  
 シャルルはそれを聞いたとき苦悩のあまり張り裂けんばかりの思いだった  
 そして立ち上がり激しく叫んだ。  
 「マケール・ド・ローザヌ、神がお前を滅ぼさんことを！  
 265 貴様はオピネル・ド・ファランザ<sup>70</sup>の息子で、  
 ガヌロンの兄弟<sup>71</sup>だ、彼奴がロランを裏切ったのだ  
 オリヴィエと十二勇士を  
 そして私がかくも愛していた20000人を。

<sup>65</sup> 原文 *vas tu fantolignant* ? Tutino の注参照。この作品に3回見られる以外には記録がない語。  
 Tutino はヴェネト語の *fantoin* ‘enfant’ との関連を指摘している。\*INFANTO+LIN+ARE. cf. it. *infante*  
 ‘enfant’.

<sup>66</sup> *Solamentre* -mentre という副詞形成接辞はロンバルディア、ヴェローナ、ヴェネトの古いテキ  
 ストに見られ、ラテン語の副詞 *scienter* や *sequenter* からの類推 (Rohlf's, *op. cit.*, vol. 1, §333)。第3  
 巻ではラテン語の副詞語尾 *-enter* の影響で *mente* が *mentre* になったと書いている (§888)。中世ス  
 ペイン語では *mientre* と *r* の入った形が好まれたが (現代語 *mente*)、これは *mientre* ‘pendant que’  
 の類推と説明される (Pierre Bec, *op. cit.*, t. 1, p. 308)。

<sup>67</sup> Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 234, Berenger 32.

<sup>68</sup> 原文では半過去 (*estoyt*) になっているが、現在形として訳出した。

<sup>69</sup> Tutino 版ではここに引用を閉じる記号が欠けている。

<sup>70</sup> マケールの父。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 751、他のテキストには出てこない名前。

<sup>71</sup> 武勲詩 *Gaydon* ではガヌロンの兄弟ティボーによるシャルルマーニュ暗殺未遂を発端とするシ  
 ャルルとゲドン (*Roland* におけるティエリー、シャルルのために決闘裁判を戦った騎士) の間の  
 戦争が語られる。この作品の詩人がこれまたガヌロンの血族である司祭に反倫理的・瀆聖の言葉を  
 を吐かしている (éd. de Guessard/Luce (1862), vv. 6438-6469) 点も興味深い。



そして私はあやつにその後とても大きな報いを与えたのだ。 270  
 高い絞首台に私はあやつを吊るした、  
 一緒に 32 人の彼の一族も。  
 他の者はフランス王国の外へ追放し  
 彼らの土地と所領を剥奪した、  
 私が臣下とともに海を渡って 275  
 聖墳墓まで行った日まで。  
 ファラオン王<sup>72</sup>が私を戦場で倒したが  
 あなた<sup>73</sup>が私を 20000 の兵とともに救った。  
 そのとき私はあなたに対して私の怒りを許し、  
 フランス王国からの追放を解いたのだった。 280  
 ローザンヌ<sup>74</sup>の地を所領としてあなたに与え、  
 お前とお前の兄弟にドルトムント<sup>75</sup>を、  
 そこではお前達に 20000 の兵が仕える  
 良い武器と足の速い軍馬でもって  
 そしてあなたを私の官房と私の臣下の相談役とした。 285  
 これらの四つのことの初めのことを私は後悔している  
 私の人生にそれを良いものとして与えたことはないだろう！  
 私は死の間近にいる、それを目の前で見ているのだ  
 なのにあなたはあらゆる方法で私に反抗する。  
 さあ我が土地から出ていけ、少しもとどまってはならない！ 290  
 私があなたを吊るさせるということがわからないのか？  
 全能の主であるこの神にかけて、  
 もし私がもう一年生きるとしたら、  
 私はあなたには土地も封土も残さないだろう！」

## VIII

マケール・ド・ローザンヌは王の言葉を聞いたとき、 295  
 人生のうちでこれ以上怒ったことはなかった。  
 すぐに王のもとから離れ、  
 宮殿から降り、彼の宿所へ帰った。

<sup>72</sup> roi Ph(F)araon ファラオン王、中東？の王。Moisan では同定できない。

<sup>73</sup> ここで *voy* に変わっている。その後 v. 280 で再び *te* となっている。

<sup>74</sup> 原文 *Luxena*。スイスのローザンヌ、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, pp. 1223-1224, Losane.

<sup>75</sup> 原文 *Trasmonte*。ドイツの都市。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 1431 Tresmoi(n)gne.

鎖が密な鎖帷子を着込み  
鎖が密な脛当てを履き 300  
兜の緒を結んで研がれた剣を帯び、  
軍馬に乗り盾に腕を通した。  
27 人の騎士とともにアーヘンを出発した。  
ローザンヌへ向け力を込めて馬を走らせる。  
アンセイス・ド・ボルドーがその時立ち上がった。 305  
「良き王よ、」彼は言った「我らの言葉をお聞きください。  
あなたは死の間近にいてそれを私はよく理解しています。  
あなたが死んだとき私たちの元にもうあなたはいない。  
戦争と攻城戦のうちにあなたは私たちを置き去りにするのです。  
マケール・ド・ローザンヌ、あの者の勢力は大きいのでから、 310  
彼の 20000 の盾を持つ臣下を集めるでしょう。  
パリの前に包囲が敷かれ、  
あなたの息子は捕らえられて、地位を追われるでしょう。  
私に言ってください、良き王よ、誰が彼を守るというのですか？  
あなたの臣下は各々の土地に散らばるでしょう。 315  
マケールに戻るよう使いをお送りください、  
彼に対して怒りをお許してください。  
あなたがあの世で非難を受けないように。」  
「アンセイスよ、」王は言った、「お前は賢い男だ！  
我々のためにマケールへ使いを遣り、彼を許せ。」 320  
アンセイスは宮殿を駆け下り<sup>76</sup>、  
自分の馬のところへ行き、鞍も載せず、  
上に乗り、力の限り走らせたので  
夕刻にはマケールに出会い  
シャルルの言葉を全て彼に伝えた。 325  
彼はそれを聞いてかつてないほど喜んだ。  
手綱の向きを変え、アーヘンへ来て  
彼と彼の部下達は皆武具を脱いだ。  
彼らは王の前にすぐに来て、  
跪いて挨拶をした。 330

<sup>76</sup> 原文 *de le payles batù batù* を Tutino は訳出していない。「足で叩く→走る」と考えた。Cf. TLFi, «battre2» B [‘Avec une idée de déplacement] Parcourir.’ *Aiol* v. 9481 (Jean-Marie Arduouin éd., Honoré Champion, 2016)と同行への注も参照。

王はそれを見て、彼らを上座<sup>77</sup>にあがらせた。  
「さあ座れ、マケールよ、そしてこれ以上話すな。」

IX

「バロンよ、」シャルルは言った、「神があなた方の助けとならんことを！  
私にフランスの伯か<sup>77</sup>将を選び出せ  
王国の冠を守れるような人を。」 335  
フランス人はそれを聞き、彼に何も答えなかった。  
マケール・ド・ローザンヌが立ち上がった。  
「シャルルよ、」彼は言った、「私の考えをお聞きください。  
もしあなたがそれを私にくださる気があれば、力強い王よ、私が受け取りましょう。  
7年間あなたのお子を支援しましょう<sup>78</sup>、 340  
それから彼を騎士にし、剣を帯びさせましょう、  
そして彼にブルゴーニュ人やドイツ人を従わせましょう<sup>79</sup>。」  
シャルルはこれを聞き、怒りで張り裂けんばかりの想いだった。  
「マケールよ、」王は言った、「神がお前を滅ぼさんことを！  
なにかにつけてお前は私に反抗する。 345  
世界を支配している主にかけて  
もしお前がこれ以上話したら、縛り首にしてやる！  
座れ、私がそう命じるのだから  
そしてこれから先もう私に話しかけるな。」

X

「バロンよ、」シャルルは言った、「勇敢で高貴な騎士達よ、 350  
さあ私に伯か<sup>77</sup>優れたバロンを選び出せ  
フランスとパリの王国を守ってくれるような人を。」  
フランス人はそれを聞いて是とも非とも言わない。

<sup>77</sup> 原文 *contramonte li à metù* 立ち上がらせた？

<sup>78</sup> 原文 *baylirò* = *baillier. franco-italien* の武勲詩 *Geste Francor* の語彙集はこの単語に‘*care for*’という訳を与えている (*La Geste Francor; edition of the Chanson de geste of MS. Marc. Fr. XIII (=256)*, Leslie Zarker Morgan (éd.), Arizona Center for Medieval Studies, 2009)。Cf. Carlo Battisti e Giovanni Alessio, *Dizionario etimologico italiano* (DEI), G. Barbèra editore, 1951, s.v. *bailire* ‘*governare, tenere in proprio potere*’ (t. 1, 408b).

<sup>79</sup> 原文 *farò atender* Morgan は *Geste Francor* では *attendre* に *attendere* と *obtenir* が混合(*mix*)されていると指摘している (Morgan, *op. cit.*, p. 943)。

そこで<sup>80</sup>王は見回し、エムリ<sup>81</sup>を見た。  
 「前に出よ、勇敢なる騎士よ、355  
 そして私の顔の上の冠を取れ。  
 7年間ルイの後見人となり、  
 王国と息子の全ての名誉を守り  
 7年経ったのちには騎士に彼をし  
 王冠を彼に渡せ、フランス人の見ている前で360  
 そして(ルイの)妻としてあなたの娘の輝く顔のブランシュフルール<sup>82</sup>を。」  
 伯はそれを聞き、下を向いた。  
 「良き王よ、」彼は言った、「あなたは正気を失っている！  
 あの年と日を覚えていないのですか  
 私たちがスペインから悲嘆に暮れて戻ってきた時のことを？365  
 あなたは死んだ公や伯を連れてきた<sup>83</sup>、  
 ガヌロンが裏切った十二勇士を。  
 そのとき海に面したナルボンヌ<sup>84</sup>をあなたは奪った<sup>85</sup>、  
 強大な王アルファリス<sup>86</sup>が支配していた街を。  
 あなたは代理人として残せる人を誰も見つけられなかった370  
 我が父アルノー<sup>87</sup>の他には、彼は私のためにそれをとった。  
 あなたは私にその地を与え、剣を帯びさせた

<sup>80</sup> 原文 *inlora* Rolhfs, *op. cit.*, vol. 3, § 930 によると *inlora* は *allora* ‘alors’ に対応する古ロンバルド形。

<sup>81</sup> エムリ・ド・ナルボンヌ。ギヨーム系列詩群の主要人物、ギヨーム・ドランジュら兄弟の父。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, pp. 123-124, Aimeri 9.

<sup>82</sup> ブランシュフルール、エムリの娘、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 248, Blanc(h)eflor 4.

<sup>83</sup> 原文 *Viy duxesiy morty li dus e li marchis* ロンスヴォーの死者の大多数はその場で埋葬されたが、一部の者たちはブライユで埋葬するべく連れ帰った (*Roland (O)*, 268 詩節、とくに 3688-3694)。あるいは死んだ状態にさせた、ということか？

<sup>84</sup> 「地中海に直接面してはいないが、ナルボンヌはローマ時代のまた初期中世の重要な港であり、イタリアと交易をしており、この詩の時代にはまだ海へのアクセスを断続的に保っていた (Caille [« succès et soucis de la fortune narbonnaise (XI<sup>e</sup>-XIV<sup>e</sup> siècles) » in *Histoire de Narbonne*] 1981 [, pp. 141-172])。オード川は後期中世に何度も進路を変えた。」 (*Roland (V4)*, v. 4191 への Cook の注)。

<sup>85</sup> ナルボンヌ征服については *Aymeri de Narbonne*, LL. 5-37 (vv. 153-1246, éd. de Hélène Gallé, Honoré Champion, 2007, texte de B1, 以下 *Aymeri*)。また *Roland (O)*, v. 3683, *Roland (V4)*, LL. 285-318 (vv. 3847- 4417, éd. Robert F. Cook)。

<sup>86</sup> アルファリス、ナルボンヌが異教徒のもとにあった頃の王、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 134, Alfaris(e)。

<sup>87</sup> エルノー・ド・ボーランド、ガラン・ド・モングラヌの息子、エムリ・ド・ナルボンヌの父、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 578, Hemaus 37.

そして私に 10000 のフランス人を与えた。  
 常に私はあなたに仕えていた。  
 もし私がナルボンヌを離れてパリへ行ったら、375  
 再び強大なアルファリスがナルボンヌを手にするだろう  
 そして私は我が妻を失うだろう、彼女達は自分がより悪い状況に陥るのを見るだろう、  
 それゆえ私が生きている日は私を悲しませるだろう  
 そして昼も夜も私は(その悲しみに)打ち勝つ必要があるだろう。  
 あなたの冠を持ち続けてください、業火<sup>88</sup>の中にそれが置かれぬように<sup>89</sup>！」380

## XI

皇帝は悲しみ嘆き  
 オリヴィエとロランの死を惜しんだ、  
 十二勇士と 20000 の戦士の死を。  
 「前へ出よ、勇敢な戦士の息子よ、  
 そしてフランス王国の冠を取りなさい385  
 そしてあなたが我が子ルイの後見人となり  
 彼を騎士にし、剣を帯びさせよ  
 それから彼に冠を与えよ、フランス人達の見ているところで、  
 あなたの妹ブランシュフルールを妻として与えよ、  
 そして彼にブルゴーニュ人とノルマンディー人を従わせよ、390  
 フランス人とプロヴァンス人とキリスト教徒を。」  
 ベルナール<sup>90</sup>はそれを聞いて怒って答えた。  
 「シャルルよ、」彼は言う、「あなたは冗談を言っているのですか？  
 あなたは覚えていないのですか、  
 私をナルボンヌ城下の平原で戦わせ<sup>91</sup>、395

<sup>88</sup> *Chanson de Roland (V4)* のナルボンヌ奪取の場面では「*Mal fou arda Nerbona*」という表現が 2 回出てくる (vv. 3927, 3939) が、『遺言』はここでも *Roland* をなぞっている。*Aymeri* でも「*De mau feu soit ele arsse!*」(v. 372) とある。

<sup>89</sup> 原文 *che in mal fogo la se'la mis!* Tutino の訳では「*che vada nelle fiamme dell'Inferno*」とあるが、なぜそのような解釈になるのかは不明。

<sup>90</sup> ベルナール・ド・ブルバン、エムリの長男。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, pp. 237-238, Bernart 51.

<sup>91</sup> フランス語の武勲詩にはないテーマ。パリから帰ったエムリは子供たちの部屋に娯楽の道具があるのを見つけ激怒し、兄弟たちが本当に自分の子か確かめると言ってそれぞれと街の外の庭 (*giardino*) で一騎討ちをする。*Nerbonesi*, 1° libro, cap. XIX-XX. (*Le Storie Nerbonesi: romanzo cavalleresco del secolo XIV*, I.G. Isola (éd), vol. 1, pp. 51-55, Presso Gartano Romagnoli, 1877.)

それから私をフランス王国へ送った勇敢なエムリのことを<sup>92</sup>。  
私はあなたに1年間仕え、  
あなたが私を騎士にし、剣を帯びさせました  
そして私に 10000 の勇敢な戦士を与え<sup>93</sup>  
私をプロヴァンスに送りました。 400  
そこで私は海に面したブルバン<sup>94</sup>を見つけました。  
ブトリントコ王<sup>95</sup>がその領主でアミールでした。  
私は彼から土地と領土を奪い  
そしてフランス王国へ帰ったのです。  
あなたは私にあなたの娘の美しいイザベラ<sup>96</sup>をくださいました。 405  
この女性から私は 1 人の子を得ました、  
この男の子はパラディン・ベルトラン<sup>97</sup>と呼ばれています。  
もし彼が武器を持つようになるまで生きてら、  
皆が彼をロランと呼ぶようになるでしょう。  
もし私が私の土地と妻と子供を置き去りにしたら、 410  
ブトリントコ王がこの地を奪い取ることでしょ。」

## XII

(王は)口を開き優しく彼に言った。  
「前へ出よ、エムリの息子よ。  
7年間私の息子の後見人となれ  
そしてフランス人の見ているところで騎士にし、 415  
彼に冠を渡せ、フランス人の見ているところで

<sup>92</sup> 「エムリのことを覚えていないのか」というのはすでにエムリが語ったナルボンヌ征服の際のことを示唆していると思われる。ロンスヴォーからフランスに帰る途中に通りがかった（異教徒のもとにあった）ナルボンヌを手中に収めることを望んだシャルルは、その地を治めることを諸侯に命じるが、自分の守るべき領土があることを理由に諸侯は拒否した（*Aymeri*, vv. 306-763 また *Roland (V4)*, vv. 3914-4004）。その時と同様にエムリの子供達も自分の領土があるのだから、王子の保護者になることはできない、と言いたいのだろう。エムリにその時のことを聞かされながら子供達は育ったのだろう。なお、ここでは *Aymeri* や *Roland* と同様の詩節構造が使われており、詩法においても上記の作品への意識が感じられる。

<sup>93</sup> 原文 *donastidi* Contini は「語尾の興味深い重複」と指摘している（«*La canzone...*», *op. cit.*, p. 112）。次の行の *mandastidy* についても同様。

<sup>94</sup> ブルバン、ベルナールの領土。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 1081, Brubant.

<sup>95</sup> ブルバンを治めていた異教徒の王、Moisan にはない。

<sup>96</sup> イザベル、シャルルマーニュの娘、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 969, Ysabel 7.

<sup>97</sup> ベルトラン、ベルナールの子、ギヨームの甥。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, pp. 242-243, Bertran 1.

そしてあなたの妹の美しい顔のブランシュフルールを。  
 彼にドイツ人とフランス人を従わせよ。」  
 ガラン<sup>98</sup>はそれを聞いて下を向いた、  
 大いに怒って王に答えた。 420  
 「シャルルよ、」彼は言った、「あなたは正気を失っている！  
 あなたはエムリ伯のことを覚えていないのですか、  
 私が花咲く野で彼と戦った時のことを？  
 その後私はフランスに来て王冠に仕え、  
 あなたは私を騎士にし、剣を取り<sup>99</sup> 425  
 私に 10000 人のフランス人を与えてくださいました。  
 私はフランスとガスコーニュも越え  
 ロンバルディアを後にし<sup>100</sup>、  
 全トスカーナを前に跳び、  
 リヨン海<sup>101</sup>の近く丘の上に向かい 430  
 そこにアンシューヌ<sup>102</sup>の地を見つけた  
 そこは強力な王イゾレ<sup>103</sup>が治めていた。  
 私は彼から土地を奪いました、それは神の恩寵でした、  
 それからサン・ドニのあなたの元へ帰りました。  
 バイエルン公ネーム<sup>104</sup>、私の義父殿が<sup>105</sup>、 435  
 私に彼の美しい顔の娘コンスタンティーヌを与えてくれたのです。  
 この女性から私は 1 人の息子を得ました。  
 彼はヴィヴィアン<sup>106</sup>と呼ばれています。皆が彼に言っているのです

<sup>98</sup> ガラン・ダンシューヌ エムリ・ド・ナルボンヌの五男。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 453, Garin 26.

<sup>99</sup> 原文 *retoli* (おそらく *retolir*) ここでは二人称と解釈した。「剣を帯びさせた」ととりたいた文脈だが、フランス語／イタリア語の辞書では *tolir* にその意味を確認できない。一人称でとれば解釈できるが、「取り戻す」ではやはり少しおかしい。

<sup>100</sup> 原文 *e Lombardia lasay de dré da my dré* は *dietro* ‘derrière’か。Cf. DEI, s.v. *dreto* (t. 2, p. 1393). また、Boerio, *op. cit.*, s.v. *drio*, p. 248a.

<sup>101</sup> アンシューヌの近くの入り江。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 1218, Lion 6. フランスのリヨンではない。

<sup>102</sup> ガランの領地。Moisan, t. 1, vol. 2, p. 1016 Ansetine 2.

<sup>103</sup> ザクセン人の王、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 973, Ysoré(s) 28.

<sup>104</sup> シャルルマーニュの忠臣、一番の相談役。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 727, Naime 2.

<sup>105</sup> 原文 *çocry a my Tutino* は *mio suocero* (< lat. SOCER) と訳している。

<sup>106</sup> ヴィヴィアン、本文では *Vyvà*、ガランの子、ギヨームの甥、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 958, Vivien 1. Archamp/Aliscans の戦いで戦死、その死は聖人の「芳香を放つ」た (*Aliscans*, éd. Claude

彼は勇猛なるオリヴィエに似ていると。  
もし私が我が領地を放置したら、インレがそれを取るでしょう、  
私を臆病者だと皆が思うことでしょう。 440  
私はむしろ自分の国を守っていたと思います。  
そして私の不倶戴天の敵に私を恐れさせましょう  
サン・ドニを守るためにフランスに留まるよりは。  
あなたの冠を持ち続けてください、業火に焼かれてしまうから。」 445

### XIII

皇帝は大いに恥辱を受けた  
フランス人がこのような恥を与えるので。  
そして長剣のブーヴ殿<sup>107</sup>を見た。  
「前に出よ、エムリ・ド・ナルボンヌの息子よ  
そして私の頭から冠を取るが良い。 450  
7年の間あなたがそれを贈り物として持つだろう、  
それから私の息子にまたそれを渡せ  
そして妻としてお前の麗しの妹<sup>108</sup>を。」  
ブーヴはそれを聞いて、顔全体でうめいた<sup>109</sup>、  
言い返さずにはいられない。 455  
「シャルルよ、」彼は言った、「あなたは忠義に欠けたお方だ！  
エムリ・ド・ナルボンヌのことを覚えていないのですか、  
私と長い槍で戦って、  
それから王冠に仕えるべく送ったエムリを  
その後あなたは私に 10000 の部下を与えてくれたのだが？ 460

---

Régnier, Honoré Champion, 1990, v. 825)。オリヴィエになぞらえられるヴィヴィアンは早逝するの  
に対し、ロランに比せられるベルトランはレヌアール (*Aliscans* で活躍する) の孫の冒険を語る  
ギヨーム系列の (物語内の時間において) 最後の作品にも登場し、やはり異教徒に殺されロラン  
と同じくガブリエルによって天に召される (*Enfances Renier*, éd. Delphine Dalens-Marekovic, Honoré  
Champion, 2009, vv. 18840-18852)。 *Aliscans* ではヴィヴィアンを天に連れて行く天使の名は明かさ  
れていないが、 *Willehalm* (Wolfram による *Aliscans* の翻案、ギヨームのドイツ名) ではケルビム  
が降り立ち、死ぬ前に叔父に会えるようヴィヴィアンを導く (49, 23-30、また 65, 6-9, Joachim  
Heinzle (éd.), *Willehalm*, Deutscher Klassiker Verlag, 1991)。

<sup>107</sup> ブーヴ・ド・コンマルシ、エムリの息子。 Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 270, Bueve 24 .

<sup>108</sup> 原文 *vostra sor la yoconda* yoconda = joconde < JUCUNDUS。 j が摩擦音化していない。

<sup>109</sup> *tuto lo vys li gondra* Tutino は注釈で *gondra* を « forma non attestata » としながらもフランス語 *grondir* < GRUNDĪRE との関連を指摘し、ブーヴの不平を表しているとした。



それから私はフランスとガスコーニュの地を過ぎ、  
 ドゥエロ川<sup>110</sup>を見つけた、とても深い川を  
 そして一番大きい波のあるところでその水を渡り  
 東に丸いコンマルシ<sup>111</sup>を見つけました。  
 神を信じたことのないフォラリス<sup>112</sup>がその街を治めていました。 465  
 私がかれからその街を奪い彼に恥辱を与え、  
 そして彼の妹を妻にしました。  
 彼女よりも優れた改宗者はいなかった。  
 私は彼女から1人の高貴な人柄の子<sup>113</sup>を得ました、  
 彼はジラルール<sup>114</sup>と呼ばれ、彼は異教徒に恥を与えました。 470  
 もし私が王冠を守るために私の土地を離れたら、  
 私は毎日そのことを恥じるでしょう。  
 私はむしろ私の丸い盾と  
 私の首<sup>115</sup>を切り裂かせたいと思う、  
 王冠を守るためにフランスにいるよりは。 475  
 さあそれを持っていてください、あなたの中には悪い忠義が満ちているのだから！」

#### XIV

皇帝は勇敢なアイメ<sup>116</sup>を見た。  
 口を開き話し始めた。  
 「前に出よ、戦士エムリの息子よ  
 そして私の頭の上の冠を取るが良い、 480  
 7年間ルイの後見をし、  
 それから彼を騎士にせよ、伯たちの前で、

<sup>110</sup> 原文 *Duraça* イベリア半島の河。Tutino はバスク地方の街 Durango の可能性もあるが、ドゥエロ川の方が可能性が高いとしている。あるいはデュランス（ガスコーニュの街）か。Moisan はアルバニアの街ドゥラス（イタリア語名 Durazzo）としている、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 1135, Duras.

<sup>111</sup> ブーヴの領地。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, pp. 1116-1117, Commarchis.

<sup>112</sup> サラセン王、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 418, Forré 1.

<sup>113</sup> 原文 *un fante* = un enfant. Takeshi Matsumura, *Dictionnaire du français médiéval*, Les Belles Lettres, 2015, p. 1499, s.v. *fant* 参照。Matsumura はこの単語を franco-italien の単語と記している。

<sup>114</sup> 本文 *Girondo* Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 491, Girard 86.

<sup>115</sup> 原文 *de mon chief la mastra sponda* Tutino は *mastra* を海運に関する語として、転用として首の意味で使われているとしているが、*mastra* = maître（形容詞用法）と思われる。「主たる端」から「首」という解釈か。

<sup>116</sup> アイメ、エムリの6番目の息子。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 122, Aïmer 10.

そして彼に守るべき冠を与えよ。

あなたの妹ブランシュフルールを彼に結婚させ

彼の敵に彼を恐れさせよ<sup>117</sup>。」

485

アイメはそれを聞いて顔を伏せ、

怒りを持って彼は皇帝を見つめた。

「良き王よ、」彼は言った「あなたは正気を失っている！

私とナルボンヌの下の平野で戦った

エムリのことを覚えていないのですか？

490

私が槍で打とうとしたため

右の鎧を私の足から飛ばし

ゆえに私を「惨めな」<sup>118</sup>アイメと呼んだのです

<sup>117</sup> 原文 *redopter Tutino* はこの語について「epentesi の p がついた *redouter*」と記しているが *DUBITARE* が語源なので語中音添加ではない。

<sup>118</sup> 原文 *çatif* = fr. *chétif* < *CAPTIVUS*. Gaston Paris が「サラセン人のもとに長らく囚われていたことに由来する」(*Manuel d'ancien français, la littérature française au Moyen Age (XI<sup>e</sup> XIV<sup>e</sup> siècle)*, 1888, p. 64, cité par Grisward) と説明して以来、Jean Frappier に至るまで、アイメの捕囚を語る失われた武勲詩を想定する説が受け入れられてきた (*Les chansons de geste du cycle de Guillaume d'Orange*, t. 1, *La Chanson de Guillaume, Aliscans, La Chevalerie Vivien*, S.E.D.E.S, 1955, p. 100)。この言説は *Narbonnais*, vv. 2916-2922 (éd. Hermann Suchier, S.A.T.F., 1898) を根拠にしていた (« *Puis que g'istrai do crestiën regné / Et j'enterrai en la paieneté, / Chevron ne laste n'ert sor moi por oré, / Ne ne jerrai desoz fete levé, / Se Sarrazin ne m'ont enprisoné ; / Mes an montaignes o en bois o en pre / Lez les rivieres ferai tandre mon tre.* » 「キリスト教徒の国から出て異教徒の土地に入った後には、嵐に対しても私の上に屋根があることはないだろう。そして屋根の下に横になることもないだろう、もしサラセン人が私を投獄しなければ。しかし私は山や森や野、川の隣にテントを張るのだ」。しかし、Joël Grisward はこの説明は根拠が弱いとし、*Nerbonesi* で *cattivo* の対に *buono* 'bon' が使われていること(したがって *captivité* の観念は弱い)や、*Willehalm* において *chétif* の借用語 *schêtis* が *arm* 'pauvre' と言い換えて説明されている (« *ez was Heimrîch, der schêtis. / sine manheit moht erbarmen, / daz man in hiez »den armen«; / ouch müete daz sin edelkeit. / erne hete der erden niht sô breit, / als ein gezelt möht umbevân. / niht anderer urbor moht er hân, / wan als der unverzaget / an den vienden bejaget.* » 「これがシェーティースなヘイムリヒであった。人が彼を「哀れな人」と呼ぶことは彼の勇敢さ (=彼) と高貴さには遺憾だっただろう。彼は一枚のテントが覆うことができるほどの広さの土地も持っていなかった。彼は恐れを知らぬ者として敵から奪ったものの他は財産を持つことができなかった。」241, 16-24) ことなどから、*chétif* という添え名は *captivité* よりもむしろ *pauvreté* と結びついた意味を持つものと結論づけている (*Archéologie de l'épopée médiévale : structures trifonctionnelles et mythes indo-européens dans le Cycle de Narbonnais*, Payot, 1981, pp. 185-191)。Heinzle は上記の *Willehalm* 241,16 への注で「(まだ) いかなる領土も受け取っておらず、その点において『貧しい騎士 *armer Ritter*』」(p. 992) と記している。242, 9 では« *pôver schêtis* »とも。実際、Mohr は *chétif* やそれに対応するドイツ語 *armman, arme* 'pauvre' は領地を持たず、騎士道によって生計を立てる騎士を指す専門用語だと主張している (Wolfgang Mohr, « *Arme Ritter* », *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 97, 1968, p. 132)。また、主題は全く異なるものの、中世ドイツの詩

そして私をあなたの元へ遣わした、正統なる皇帝よ。  
 あなたはわたしに剣を帯びさせ、私を騎士にし 495  
 そして私に 10000 の戦士を与えてくださいました  
 私があなたに語るができるような、  
 誰からも土地も封土も受け取らない、という誓いによって。  
 私は異教徒を攻めるためにスペインに入り、  
 トルトサ<sup>119</sup>を見つけました、裕福な街を。 500  
 マルダジュ王<sup>120</sup>がその領有権を持っていました。  
 彼から街と名誉と土地を奪いました  
 そして彼の娘も、その人を私は妻としているのです、  
 そして彼女には桶の中で洗礼を受けさせました<sup>121</sup>。

人 Hartmann von Aue の『哀れなハインリッヒ *Der arme Heinrich*』の解説で Grimm は、エムリの息子に限らず、Aimer/Heinrich という名には *chétif/arm* に類するあだ名がつけられることが多いことを指摘している (Willhelm Grimm & Jakob Grimm, *Der arme Heinrich von Hartmann von Aue*, Realschulbuchhandlung, 1815, p. 210)。Narbonesi においてエムリとの手合わせで、優れた戦士であるアイメは父に大怪我を負わせることを恐れわざと手を抜いて落馬する (ちなみにギヨームは全力でぶつかりエムリの肋骨を何本も折ってしまう) が、全力で向かってこいという命令に背いたことにエムリは激怒し、アイメに次の言葉を投げつける、*« O disubbidiente figliuolo, io ti do la mia maledizione, però che tu non ài ubbidito i mia comandamenti, e non voglio che tu sia più chiamato Namieri, ma comandoti che ti facci chiamare il cattivo Namieri, e comandoti, quando tu sarai fatto cavaliere, non alberghi mai in terra murata, nè mangiare in tavola apparecchiata, che non debbi tenere mai terra da uomo del mondo, e se nissuna cosa di queste fallirai, sia maladetto da Dio, e da me. »* 「おお、反抗的な息子よ、お前に私の呪いをくれてやる、お前が私の命令に従わなかったのだから、そして私はお前がナミエーリと呼ばれるのを望まない、そしてお前がカッティヴォ・ナミエーリと呼ばれることをお前に命じる、またお前に命じる、お前が騎士になったときには壁に囲まれた場所に宿を取らないこと、準備されたテーブルで食事を取らないこと、世界のどんな人からも土地を受けないことを、そしてもしこれらのことに背いたなら、神に呪われるがいい、そして私からも。」 p. 53)。父が *chétif* というあだ名をつけたという点、誰からも封土を受け取らないという『遺言』の記述とも一致する。訳語としては、*pauvre* の意味で解釈しつつ、『哀れなハインリッヒ』と差別化するため「惨めな」とした。

<sup>119</sup> 原文 *Toloxa Tutino* は *Tolosa* と訳しているが、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, pp. 1429-1430 *Tortolo(u)se* ではスペインのトルトサとされている。異教徒の王が支配していることからバスク地方のトロサよりもカタルーニャ地方のトルトサであると考えるのが妥当か。

<sup>120</sup> トルトローザ (Tortolose) のサラセン王、Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 673, *Maldaçi*.

<sup>121</sup> 原文 *laver et batigier* = *laver et baptiser*. 古フランス語では *baptisier et lever* とセットでよく使われる (語順は脚韻に応じて変わる)。Tuschen はこれと対比して古オック語では *laver et bateyar* (= *laver et baptiser*) が使われ「洗礼の行為と秘蹟の効果がより強く強調される」と説明している (Antonie Tuschen, *Die Taufe in der altfranzösischen Literatur*, Inaugural Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde, Hohen philosophischen Fakultät der Rheinischen Friedrich Wilhelms Universität zu Bonn, Buchbinderei W.C. Wolf, Wanne-Eickel, 1936, p. 152)。franco-italien の文学作品でも RIALFrI のコーパ

この女性から私は後継者を得ました： 505  
 フランス人は彼をちいさなゴーチェ<sup>122</sup>と呼んでいます。  
 もし彼が武器を持てるまでに成長したら、  
 彼がロランとオリヴィエの仇を取ることでしょ。う。  
 今私はスペインに戻らなくてはなりません、  
 私は 200000 の騎士を残してきているのですから。 510  
 離れたたり見捨てたりすれば大きな部隊を失うことになりま  
 私は塔と谷と土地を奪いました。  
 優に 30 の国を海沿いの港とともに。  
 フランスを、冠と王国を持ち続けてください。  
 私はそれが欲しくはないし望んだりも求めたりもしません、 515  
 だからそれは他の騎士に与えてください。  
 業火がバリやその地方を焼いたとしても、  
 1 ドゥニエの価値ほどにも決して気にしないので！」

## XV

皇帝は悲しみ嘆き  
 オリヴィエとロランの死を悔やんだ、 520  
 そしてランスのチュルパンと彼の臣下 20000 人の死を。  
 「ああ、ガヌロンよ、なぜロランを裏切ったのか、  
 私をかくも愛していた<sup>123</sup>我が愛しい甥を、  
 彼は私を安心して眠らせてくれて、  
 私の寝室に私の素晴らしい妻と一緒に居させてくれたのに？ 525  
 不実なガヌロンよ、私はお前をひどい地獄に送ろう！  
 オリヴィエとロランが生きていた時は  
 皆が私を恐れていた。  
 今や私は死の近くにおいて、それを目の前に見ている。  
 私はフランス王国には誰も見つけられない 530  
 私の息子ルイを守ろうとするような者を。」  
 そうしてすぐに彼の子供たちを呼んだ。

ス (<https://www.rialfri.eu/rialfriPHP/public/lessico/lessico/lettera/l>) で baptiser が lever/laver と共起する例は 127 例中 9 例であり、そのうち Roland (C) (lever 3 例/5 例) と Roland (V7) (lever 1 例, laver 3 例/10 例) が 7 例を占める。laiver は lever と読むことも可能か？

<sup>122</sup> Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 476. Gautier 179 (de Tolose) ?

<sup>123</sup> Meneghetti の校訂 amava に対して Tutino の校訂では amamava となっている。一行を十音節とすると amamava でないと音節数が保てないためか。

まずロテールに口づけした、一番年長の彼に  
 そして美しいイザベラ<sup>124</sup>に  
 そして小さなアルーナとベルタに同じように、 535  
 それから幼児ルイを掴んだ。  
 彼は立ち上がり、ルイを皆に示した。  
 「見よ、バロンよ、私が悲しむことを与えるかどうかを。  
 私は死の近くにおいて、それを目の前に見ている  
 そして我が息子ルイを守ってくれる人を見つけられない。」 540  
 フランス人はそれを見て、皆が、  
 ガヌロンとその一族皆を呪った<sup>125</sup>  
 皇帝は小さな声で話し  
 それから息子ルイを離した。  
 「その年と時間が思い出される 545  
 わが勇敢なる父が死んだ時のことが。  
 彼は私に有力な一族の名を挙げていた。  
 有力な一族というのは3つある。  
 1つ目はピピン<sup>126</sup>とアンジェル<sup>127</sup>の一族で  
 もう1つはガラン・ド・モングラヌ<sup>128</sup>ので、 550  
 3つ目はドイツの領主<sup>129</sup>の一族だ。」

<sup>124</sup> 原文 *Yxabella al cor çant* Tutino は *cor* を *cuore* 「心」と訳しているが、*corps* 「体」として訳出した。*Cors gent* は *cler vis* と同じく身体的な美しさを描写する定型表現であり (Roger Dragonetti, *La technique poétique des trouvères dans la chanson courtoise*, Slatkine Reprints, Genève, 1979, p. 253)、武勲詩でも頻出する (例えば *Roland (O)*, で *cors* を形容して *gens* が使われているのは v.118, 305, 895 他)。*Morgan* の 1314 行目への注 (*op. cit.*, p. 963) も参照。一貫性のないこの *cor/cors* も *franco-italien* 特有の例といえるだろうか。

<sup>125</sup> 原文 *malensencie* Tutino は *maledicendo* (< *maledire*) と訳しているが、*malsententiare* や *mal-essence* などと解釈できるものか。あるいは *malsentir* (Boerio, *op. cit.*, p. 589) と連なる語か。

<sup>126</sup> ピピン短軀王、フランク王、カール・マルテルの長男、シャルルマーニュの父、*Moisan*, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, pp. 772-773, Pepin I (le Bref).

<sup>127</sup> Contini は「Gaston Paris は *Reali di Francia* を根拠に Angelo が Pipino の父 Costantino のことだと認めている」(Contini, « *La canzone...* », p. 122) と記している。*Bovo d'Antona* でもピピンの父は *Angelo/Ançelo* という名で出てくる (*Geste francor* (éd. Morgan), vv. 3142, 3165)。

<sup>128</sup> ガラン・ド・モングラヌ、サヴァリの子、エムリ・ド・ナルボンヌの祖父、第3のジェスト (*tierce geste*) の始祖、*Moisan*, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 455, Garin 52 (de Monglane).

<sup>129</sup> ドーン・ド・マイヤンス、*Moisan*, *op. cit.*, t.1, vol.1, p. 350, Doon 21 (de Maience)。ネーム公もドイツの領主といえるが、ジェストとして挙げられるのは普通「王のジェスト」、「ドーン・ド・マイヤンスのジェスト」、「ガラン・ド・モングラヌのジェスト」の3つ。順番が普通と違っていることも指摘するべきだろう。武勲詩 *Doon de Mayence* ではシャルル、ドーン、ガランが共闘し

「諸侯よ、」シャルルは言った、「我が考えを聞け。

このガランから4人の子が生まれた。

1人目はアルノー・ド・ボーランド、

2人目にレニエ<sup>130</sup>、そしてジラルール・ド・ヴィエンヌ<sup>131</sup>、 555

4人目がミロン<sup>132</sup>、彼は広いプーリア<sup>133</sup>を領した。

このアルノーからのちに1人の子が生まれた、

それが私の前にいるエムリである。

彼は妻にあるとても美しい女性を娶った、

大いなるパヴィアのボニファーチョ<sup>134</sup>の妹を。 560

この女性から多くの子が生まれた。

1人目はベルナール・ド・ブルバン

2人目がアルノー<sup>135</sup>、そして幼いジブラン<sup>136</sup>

さらにガランとブヴォン・ド・モングラン。

6人目がアイメ、そして7人目が幼いギヨーム<sup>137</sup>。 565

雅で美しい娘が3人。

ギヨームはいったいどこにいるのか？ 彼を私の前に来させよ！」

エムリはそれを聞き立ち上がった。

「良き王よ、」と彼は言った「何を言っているのですか？

3年も前に 570

オリフラムをあなたは私の子に与え

彼の元に40000人の戦士を与え

---

ていることも思い出しておきたい。Contini も同作品において3人が同じ日に生まれたこと、その時に奇跡が起きたことに言及している («La canzone...», p. 122)。

<sup>130</sup> レニエ・ド・ジェンヌ、ガラン・ド・モングラヌの息子、オリヴィエとオードの父。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 823, Renier 87.

<sup>131</sup> ジラルール・ド・ヴィエンヌ、ガラン・ド・モングラヌの息子。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 495, Girard 149.

<sup>132</sup> ミロン・ド・ブイユ、ガラン・ド・モングラヌの息子。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 709, Milles 70.

<sup>133</sup> 原文 *Puya Puglia*、イタリア南部の地方。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 1333, Puille.

<sup>134</sup> ボニファス (イタリア語でボニファーチョ)・ド・パヴィイ、ロンバルディアの王。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 251, Boniface 2. エムリの妻の名はエルマンジャール (Ermanjart)。

<sup>135</sup> エルノー、エムリの4番目の息子。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, pp. 578-579, Heranut 46 (de Gironde).

<sup>136</sup> ギバール (ギブリン)、エムリの7番目の息子。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 531, Guibert 6 (d'Andrenas).

<sup>137</sup> ギヨーム、エムリの3番目の息子。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, pp. 539-540, Guillaume 66 (d'Orange). まだオランジュの領主ではなく、おそらく鼻も傷付けられていない。兄弟の生まれ順もフランスの武勲詩における伝統と異なる。

そうして彼を大スペインに送ったのです  
 オリヴィエとロランの仇を討つために。  
 今や 10 か月も経ってしまった 575  
 私の子の消息を聞かなくなってから。  
 私が思うに彼はペルシアのサラセン人によって殺されたのでしょ  
 うもし彼が死んだのなら、私はこれ以上生きることを望みません。」  
 王の心はそれを聞いて怒りで張り裂けんばかりだった。  
 彼らはオリヴィエとロランに関する悲しみを忘れ 580  
 立派なギョームのことを泣く。  
 皆がギョームのことを泣く  
 そして誰よりもエムリが自分の子のことを泣く。  
 このように大いに悲しんでいる時に、  
 アーヘン中にとても大きな熱狂<sup>138</sup>が起こった、 585  
 ラッパと太鼓と角笛が鳴っていた。  
 それはスペインから帰ってきたギョームだった。  
 40000 人が彼の仲間にはいた  
 そして外に平原中に宿を取った。

XVI

今やギョームがアーヘンへ来た、 590  
 彼の仲間には 40000 の盾があって、  
 そして草の生えた平原に宿を取った。  
 ギョーム伯は、(神が彼の力を増やしますように、)<sup>139</sup>  
 100 人の騎士と共にアーヘンへ来た。  
 広場へ来て、石の台に降りた。 595  
 フランス人たちはその知らせを聞いた。  
 彼らはすぐに宮殿から来て  
 そしてエムリ自身もゆっくりすることはしなかった。  
 ギョームのところへ来て(?)<sup>140</sup>彼の手を取った。  
 「息子よ、」彼は言った、「よくぞ来てくれた！」 600

<sup>138</sup> 原文 *flambor Tutino* は *fervore* と訳しているが、フランス語の *flambor/flambeur* で解釈すると「炎、輝き」となる。「熱気」から「熱狂」という意識か。

<sup>139</sup> カッコは補った。

<sup>140</sup> 原文 *Vem Guyelmo* 主語を前行のエムリと取り、*Guyelmo* を *à Guillaume* ととった。*Tutino* は *Guillaume* を主語として、その後主語が変わると解釈しているようだが、文脈からはギョームのところへエムリが向かっていると考えられる。

ギョームは彼に挨拶を返した。  
 彼は宮殿に登った、諸侯らも共に。  
 ギョームはシャルルを見て、彼の足元へ来た。  
 彼は武具を全て脱がされた。  
 「ギョームよ、」王は言った、「よくぞ来てくれた！」 605

XVII

「どこから来たのか？ 私に決してそれを隠してくれるな！」  
 「スペインからです、我が君、そこに私は長いこといました。  
 大勢のサラセン人とペルシア人を私は征服しました、  
 42 の街と 100 を越える町村も  
 そして何千<sup>141</sup>か分からないほどのサラセン人を殺しました。 610  
 まだオリヴィエとロランの復讐はできていません。  
 私はノベル<sup>142</sup>に 16 か月間いました  
 何度もジュスタモント<sup>143</sup>と戦いましたが、  
 1 アルパンほどの土地も勝ち取ることはありませんでした。  
 今では 22 日経とうとしていますが 615  
 私が祈祷において前で祈っていると  
 私は声を聞き大いなる輝きを目にしました。  
 それは自分がイエス・キリストの天使<sup>144</sup>だと言いました  
 そして言いました、私が武器と武具をとって  
 馬に乗るようと、私と私の部下たちが、 620  
 そしてジュスタモント・ド・ノーブルと戦い、  
 その土地と彼について私の望むところを得て  
 それからフランスにぐずぐずせず戻るように、と。  
 そして私は滞りなくそれを行いました。  
 私は盾の斬撃でジュスタモントを殺し、 625  
 私の家臣らは彼の恐るべき民と戦ったのです。  
 その内の 40000 人以上が戦場で死に

<sup>141</sup> 原文 *myara* cf. a.it. *migliaro* ‘*migliaio* (millier)’ (DEI, t. 4, 2457a)

<sup>142</sup> 原文 *Nobele* ノベル、スペインの街。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 1287. おそらく Pamplona のこと (Contini, « La canzone... », p. 111, n. 1.)

<sup>143</sup> 原文 *Iustamont* 不明。Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 634, Justamont 1 の項に MC と記されているが、「ピピンによって殺される」と書かれているため別人と思われる。

<sup>144</sup> 原文 *Agnelle* Gdf, DMF 等は -gn- 形を示していないが、Zingarelli, s.v. *angelo* や LEI, vol. 2, p. 1179、TLIO *angelo* (1) の項目に -gn- 形が見られる。gn/ng 交替に関しては Rohlfs, *op. cit.*, t. 2, §256 を参照。



そして私の部下の幾らかも失われました。  
 塔と宮殿は前に倒れました  
 身分の高い者も低い者も失われました。 630  
 それからテントと幕舎を引き上げさせました  
 私に聖天使がした命令によって。  
 22日間止まることはしませんでした、  
 私が食事をする時以外は、私と馬が、  
 私の部下たちと私の足の速い軍馬とが。 635  
 私はあなたの前に至るまで進んだのです。  
 あなたのあらゆる命令を行う準備ができています！」  
 「ギョームよ、」王は言った、「神にかけて、前に出よ。  
 今日木曜で明日は金曜になる  
 その日、人は改悛の名の下に断食<sup>145</sup>をせねばならない。 640  
 そしてその次の日は土曜となり、その日を神はとでも愛している、  
 そしてこの日に私は世を去ることになる。  
 私は神と聖人たちに対して遺言をし、  
 土地を息子と子供達の間で分けた、  
 しかし幼いソレイを守る者を見つけられていない。 645  
 私はあなたに全能の神の愛にかけて任せたく思う、  
 フランス王国を維持し守ることを  
 ゆえに身分の低い者高い者に対して裁きを下せ。」  
 ギョームはそれを聞いた時かつてないほど喜んだ。  
 「喜んで、愛する王よ、私はあなたの望むことを行いましょ  
 650  
 うそして神と聖霊に誓いましょう。  
 彼に従わない者や、その望みを行わない者は、  
 エムリやその子供たちであっても、  
 もし彼がルイに背くのであれば、私がその者に悲しみを与えましょ！」  
 フランス人はそれを聞き、互いに言い合った、 655  
 「こいつはまさに悪魔だ、ここにいるのは、  
 彼は人々を死なせることだろう、ロラン伯がしていたように、  
 ロラン伯はペルシア人に恥辱を与えるために人々をスペインに連れて行ったのだ<sup>146</sup>。」

<sup>145</sup> 原文 *deçumar* fr. *déjeuner* <DIS-IEIUNĀRE ではなく it. *digiunare* <IEIUNĀRE.

<sup>146</sup> そしてロランの部下は生きて帰らなかった。好戦的なギョームもロランと同じように多くの人を死地に連れていくことだろう、ということか。ロランが(敵だけでなく味方によっても) *diable* と結び付けられるのはとりわけ *Aquilon de Bavière* で繰り返される。

XVIII

「ギョームよ、」王は言った、「あなたの騎士道によって<sup>147</sup>  
あなたはフランスをあなたの監督下に持たねばならない。 660  
私の元に勇敢なるエリーを来させよ  
そして彼は妻に私の娘アルーナを受け取るのだ。」  
王は彼にそれを頼み、彼は王に対してへり下る。<sup>148</sup>  
彼(エリー)はすぐに来た、遅れることなく。  
王は彼を見て手を掴んだ。 665  
「さあ息子よ、」と王は言った、「神があなたを祝福してくれますように。  
我が娘アルーナを妻に娶り  
それによって土地と多くの広大な邦を手に入れるが良い、  
そこではあなたに 10000 の騎士が仕えるだろう  
良い武器とハンガリー産の軍馬でもって。」 670  
エリーはそれを聞いた時、心を込めて彼に感謝する。  
「エリーよ、」王は言った、「さあ妻として取るが良い、  
我が娘アルーナを、私があなたによろこんで与える娘を。」  
エリーはそれを聞いて、話し始めた。  
「そうしましょう、王様、喜んで 675  
もしギョームが私を支え助けることを望むなら。」  
「そうしよう」伯は言った、「あなたは恐れるべきではない  
もし戦争をして、私の兄弟を殺すことになるとしても  
そして私の父である戦士エムリを殺すことになるとしても。」  
エリーは答えた、「他のことは望みません。」 680

XIX

王は言った、「エリーよ、前へ出よ！」  
そして彼はすぐに来た  
そして教皇がすぐに彼に十字を切った。  
王は彼に娘を聖霊の名において与えた。  
「神がそなたに息子や子供を与えてくれますように 685

<sup>147</sup> 原文 *per vostra cortexia per cortesia* はイタリア語では中世から願望、要求の言い回しとしても用いられていたため (TLIO s.v. *cortesia* 3.2.2)、そのように解釈することも可能か。

<sup>148</sup> 原文 *Li conte lo demanda et inve' de luy se umylie* Tutino は *demanda, se umylie* とともに *li conte* を主語としているが、それだと行動の順序がおかしくなるため、*demanda* の主語をシャルル、*li conte* を与格、*lo* をエリーを呼ぶこと、*se umylie* の主語をギョームとして訳した。

将来キリスト教徒を守るような子を。」

1つ目の指輪を彼にフランス王が与え、  
2つ目をギョーム、立派な体躯の持ち主が、  
そしてもう1つを杭持つエムリ<sup>149</sup>が与えた。  
最も慎ましい指輪も200マルクの価値があった。  
明るる日<sup>150</sup>その女性は結婚した。

690

## XX

「エリーよ、」王は言った、「私はお前に妻に与えよう  
そしてお前にプロヴァンスとその邦全てを与える、  
そこであなたに10000の戦士が仕えるだろう、  
良い武器と足の速い軍馬をもって。  
ロンバルディアの街ヴィコリーラ<sup>151</sup>。  
その町は要塞化されて十分に備えている<sup>152</sup>  
家畜と、魚と他の美味によって。  
そこに入るのも出るのも人は見ることができない  
誰もそこで食べるのを見ることはできない、  
そこであなたに10000の騎士が仕えるだろう。  
ロンバルディアには求めるべきものはそれ以上ない。」  
「殿、」エリーは言った、「あなたの望みのままに。」

695

700

## XXI

「エリーよ、」王は言った、「戦士よ、前に出よ、  
神の愛と我が美しい娘への愛によって  
あなたに鎖帷子と丈夫な足覆い、  
盾と兜と剣オートクレールを与えよう、

705

<sup>149</sup> 原文 *Naymeris ch'oyt le pei ferant* Tutino の注参照。Cornagliotti, *op. cit.*, p. 187, Meneghetti, *op. cit.*, p. 272.

<sup>150</sup> 原文 *lo çorno fo la dama spoxea avant* TLIO, *Enciclopedia italiana di scienze, lettere et arti* (Treccani, <https://www.treccani.it>)では *il giorno avanti* は「前日」の意だが、ここではそれでは意味が通じない。Tutino は *il giorno (dopo)* としているため、それに従った。

<sup>151</sup> 原文 *Vicorira* Cornagliotti は Bigoglio のヴァリエントではないかとしている (*op. cit.*, p. 118)。Meneghetti は Voghera のこととして、そこに詩人、あるいは詩の注文者のためのその土地の称揚として名前が挙げられたものと解釈している (p. 256)。Cf. Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 2, p. 1065, Bicorna.

<sup>152</sup> 写本では *aserer* のところを Meneghetti は *aseuré* と修正し、Tutino もそれに従っているが、Meneghetti は *asasié* かもしれないと記している (*op. cit.*, p. 282)。 *asasié* で読んだ場合「家畜や魚、その他の珍味で腹が満たされている」という解釈になる。

この剣は勇猛な戦士オリヴィエのものだった。」  
 「殿、」エリーが言った、「これは豪華な贈り物ですね。」  
 「確かに、」王が言った、「私はあなたに1つさらに大きなものをやろう。 710  
 私はあなたにこれまでで最も優れた軍馬を与える  
 ロランのヴァイヤンティフは死んでしまったのだから。  
 マルシル<sup>153</sup>の息子が貢物として私にそれをよこした。  
 この馬はマザガイユ<sup>154</sup>という名で、とても走るのが速い。  
 もしお前が我が娘から息子か子供を得るなら、 715  
 その子に武器と足の速い軍馬を与えるように、  
 もし彼女から息子を得られなかったら、それをフランスに送りなさい  
 後継<sup>155</sup>であるルイの元へ。」  
 「殿、」エリーは言った、「全てあなたの思し召しのままに。」  
 「エリー、」王が言った、「お前に一つの贈り物をしようと思う。 720  
 神の脇腹を突いた高貴な槍<sup>156</sup>である。  
 これは生ける「羊」の最も美しい宝である。」  
 「殿、」エリーは言った、「これはとても素晴らしい。  
 私は神と聖なる力に誓います  
 決してキリスト教徒を攻撃することはしないと！」 725  
 その誓いをした時エリーは失敗した、  
 のちにそのことを後悔する時が来るのだ。<sup>157</sup>  
 マケールとトラumontが彼から領地を奪い、  
 それから彼を生涯のうちにかつてなかったほどの  
 大いなる貧窮に送り込んだ。<sup>158</sup> 730

<sup>153</sup> サラゴッサ（スペイン）のサラセン王、ロンズヴォーの戦いで倒される。 Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 693, Marsile 1.

<sup>154</sup> Cf. Moisan, *op. cit.*, t. 1, vol. 1, p. 684, Marchegai.

<sup>155</sup> 原文 *remanant* Matsumura によると、'héritier'の意はピカルディーの用法 (*op. cit.*, p. 2884 [2018年の第2刷では p. 2885 !], s.v. *remanant*) だが、ここではこの意味が適当と思われる。「多くの武勲詩がピカルディー方言で書かれているように、*franco-italien* のフランス語の部分はしばしばピカルディー方言」である、と Duval は指摘している (Frédéric Duval, *Le français médiéval*, Brepol, L'atelier du médiéviste 11, 2009, p. 52) が、ここは語義のピカルディスムととれるだろうか。

<sup>156</sup> Tutino は根拠を示さずに「おそらくデュランダル」としているが、おそらく違うだろう。デュランダルはロランが持っていた剣（槍ではない）だが、剣はすでにオートクレールがエリーには与えられている。

<sup>157</sup> 原文 *poys vene un tempo ch'el n'avé impentimant impentitant* は辞書にない。 *impenitence* ではなく *penitence* ととった。

<sup>158</sup> 武勲詩 *Aiol* で語られるのが Makaire の讒言により追放された Elie の息子 Aiol の冒険である。

XXII

聖ペトロの祝日になった。  
 今は第三時課の時だ、王はその到来を<sup>159</sup>聞いた。  
 ろうそくと燭台が天に向けて燃える  
 そして天使ケルビムが現れ  
 勇ましい顔のシャルルの魂を待つ。 735  
 「バロン、」シャルルが言った、「今や私は行かねばならない、  
 今日死んで、あなた方から離れなければ。  
 前へ出よ、ギヨームよ、そして皇帝となれ。」

XXIII

「ギヨームよ、」王は言った、「家臣よ、前へ出よ  
 そしてフランスの王冠を取れ。」 740  
 ギヨームはそれを聞いた時、少しも間をおかず、  
 外套を脱ぎ、剣を腰から外し、  
 王の前に跪いた。  
 シャルルはすぐに立ち上がり、  
 冠を手取る、それは光り輝いている。 745  
 彼の頭の上にそれを泣きながら置く  
 ——教皇も彼の前にいた——  
 彼の両手でギヨームにしっかりと与え、  
 それから彼の首に優しく両腕を置いた。  
 「ギヨーム！」フランスの皇帝が呼んだ。 750  
 そして王令を發させ、伯は立ち上がった。  
 多くの人は立ち上がらない<sup>160</sup>、身分の高い者も低い者も。  
 「ギヨームよ、」王が言った、「私のために我が子を守ってくれ、  
 7年の間、それから彼に剣を帯びさせよ、  
 彼に冠を与えよ、フランク人たちの見ているところで 755  
 そして彼にあなたの妹を結婚させよ、とても素晴らしい女性を  
 彼がフランス王国の冠を持てるように  
 彼にブルゴーニュ人とノルマン人を服属させよ

<sup>159</sup> 原文 *lo son vyner son* は所有形容詞と解釈したが、「音が来るのを聞いた」と読むことも可能か。

<sup>160</sup> 原文 *plurier non driça*.

そしてその後彼の旗印を 20 年間持ちなさい。」  
ギョームは彼に答えた、「喜んで。」

760

#### XXIV

「ギョームよ、」王は言った、「臣下よ、さあ聞け。  
私の鎖帷子とそれから足覆いを取れ、  
盾と兜と剣ジョワイユーズを、  
デュランダル<sup>161</sup>を除いてこれより優れた剣を見ることは決してないだろう、  
そして私の拍車と足の速い軍馬と  
大きな槍とそこに結びつけられた吹き流しを。  
見つけ得る財のためにその旗を軽んじてはいけない<sup>162</sup>。  
あなたが死ぬ時が来たときには  
それをいかなる騎士にも渡してはいけない  
その人があなたの一族の生まれの者でなければ。」  
伯は彼に答えた、「仰せのままに。」

765

770

#### XXV

「ギョームよ、」王が言った、「私の考えを聞け。  
あなたが妻を娶ることを望む日が来たときには  
オリフラムをあなたに渡して任せる  
あなたはフランスの騎士の大軍を率いるのだ。  
フランスと大ブルゴーニュを後にして、  
ローヌ川を越えてプロヴァンスへ行くのだ。  
スペインの入り口にオランジュを見つけるだろう。  
ファブランの息子、ドン・ティボーがそこを治めている、

775

---

<sup>161</sup> 前述のようにシャルルがエリーに与えた「槍」に Tutino は「おそらくデュランダル」という注を付けているが、ここでデュランダルの名が出るため近くにこれもあるはず、と考えたのだろうか。柄に聖遺物が収められているという記述が *Roland* にもある（槍の言及はない）が、槍の一部を宿している剣→槍と考えることも可能か。*Roland* ではロランの剣の行方は語られることはなく、オック語版では湖に投じられ、「以後誰も見ることはなかった」（vv. 1608-1609）。

<sup>162</sup> 原文 *no la tançer per avoyre che sia atrovéy* Tutino は Günter Holtus (*Lexicalische Untersuchungen zur Interferenz : die franko-italienische « Entrée d'Espagne », Niemeyer, 1979, p. 226*) に言及して *avoyre* を *ivoire* と取っているがここは *avoir* だろう。*Geste Francor*, v. 12112 に *« (charger) D'oro e d'avoir e de çoie molto çer »* 「金と avoir と高価な宝石（を積んで）」とあり、ここへの注 (p. 1093) で Morgan は「avoir が *possessions* と *ivory* の 2 つの意味を取り得る」と書いているものの、グロッサリーに *ivory* と訳している *avoir* の項目はないため *possession* と解釈しているとみられる。

ティブール<sup>163</sup>をアフリカのドン・ティボーは妻に得た。 780  
 彼から夫人と街と財産を奪え。」  
 伯は答えた、「喜んで、  
 それを成されるべきように為しましょう、神がお認めになるのであれば。」

XXVI

「ギヨームよ、」王は言った、「あなたのことでとても遺憾に思っている。  
 天使がそれを私に言ったのだから真実となるだろう。 785  
 あなたはその女性から息子も跡取りも得ないだろう。  
 もう一つのことで私はさらに遺憾に思っている。  
 すなわちあなたのためにスペインで騎士が死ぬ  
 十二勇士全てのために死んだよりも多く、  
 しかし彼らに関しては、彼らの魂は救われるだろう。 790  
 私はあなたに土地も封土も与えたくない  
 オリフラムを贈り物の代わりに持っていき  
 それがあなたに必要となるところどこへでも。  
 フランスの軍勢を率い連れて行け、  
 オランジュの街を救い助けるために。 795  
 もしレイが言い訳しようとしたなら、  
 あなたは彼の頭から王冠を取り除き  
 あなたに良いと思われること全てをせよ。」  
 フランス人たちは皇帝の前で同意した。

XXVII

ギヨームは言った、「あなたに最大の感謝を。」 800  
 「バロンよ、」シャルルは言った、「私はもはやここまでだ。」

<sup>163</sup> 原文 *Tyborga* 異教徒の王ティボーの妻、のちにギヨームの妻、ギブール。 *Moisan, op. cit., t. 1, vol. 1, p. 532, Guibo(u)r 1* また *t. 1, vol. 2, p. 751, Orable 1*. 固有名詞もしばしば変形する（あるいは変わる。たとえば本作品で *Gille* の妻となる皇帝の娘の名は *Aluna* だが、*Elie de Saint Gilles, Aiol* では *Avisse*）が、*Guillaume/Guibourg* が *G* のペアであることがしばしば言及される（例えば *Jean Frappier, op. cit., p. 10*）ことを思うと、*Tibourc/Thibaut* の *T* のペアを意識したと考えられようか。*Guibourg* は洗礼名であって、異教徒時代の名は *Orable* なので、*Thibaut* の妻の名として出てくるのはすこしおかしい。*T* で始まる形は *Moisan* はフランスの作品としてはこの作品しかあげていない。イタリアの作品では *Tiburga (Ugone d'Alvernia)* または *Tiborga (Storie Nerbonesi)* の形で出てくるがいずれも *Barberino* のもの (*Moisan, op. cit., t. 2, vol. 3, p. 349*)。なお *Aliscans* の franco-italien 版でも *T* で始まる形が出てくる (*La versione franco-italiana della « Bataille d'Aliscans »: Codex Marcianus fr. VIII [=252], éd. Günter Holtus, Niemeyer, 1985, vv. 131, 628*)。

今日は聖ペトロの日で第三時が過ぎようとしている。  
私は死ななければならぬ、天使が私を待っているのだから。  
私が横たわることになる墓室へ私を連れて行け  
そして泣かないようにせよ、身分の低い者も高い者も。」 805  
さて右に力強いギヨーム伯が立ち、  
エムリ伯が左側に。  
ルイは前を行き、何度も彼を見た<sup>164</sup>。  
王とともに身分の低い者も高い者もあり、  
そして教皇は甘美な歌を歌いつつ。 810  
1日にこんなにも大勢見たことはなかった  
枢機卿と司教と聖なる修道士を、  
そして彼を聖霊の名の下に墓室へと連れて行った。  
シャルルはその墓を見たとき胸を傷つけた。  
そして王は言った、「なんと私は悲しくなれることか！ 815  
私は 36 の王国を戦いによって征服し、  
今では私は死の近くにいる、それを私の目の前で見ているのだ、  
そして他の眠っている人と同じくらいしか土地を持たないのか。  
墓室は美しく大きくあるべきだ  
それぞれの隅に座っていられるくらいに 820  
1000 人の騎士が食事のテーブルに、  
また前でも後ろでも騎馬試合を行い  
かつて王だった私を見るほどに、  
毎年、十分に大きくあるように<sup>165</sup>、  
聖ペトロの日の 5 日前に。 825  
墓室は美しくはあるが、私の好みではない。」  
すると天使ケルビムがシャルルの手を取る。  
「良き王よ、」彼は言った、「あなたは冗談を言っているのですか！  
神はあなたの望みの多くを行うことを許した  
この儂い世において。 830  
あなたがこれ以上生きることはあの方の望むところではない。  
思い出すがいい、良き王よ、かくも偉大な神は

<sup>164</sup> 幼いルイが、目を離れた隙に父が死んでしまうのを恐れて何度も振り返るというパセティックな詩行。墓の立派さに不満をこぼすシャルルがコミカルに感じられてしまう。

<sup>165</sup> この一節 (*si fosse tote grande*) は挿入句と取る。文全体の意味は「毎年聖ペトロの祝日に騎士たちが集まって食事をしたり、騎馬試合ができるくらいに墓室は大きくなくてはいけぬ」ということ。



聖墳墓に入ったとき

十分に体を伸ばせるほどの土地を持たなかったことを。  
 あなたは哀れな王<sup>166</sup>でありながらかくも多くを求めている。 835  
 神はこのようにいうことを命じ、私はそれを言っているのである。  
 あなたは他の眠っている人と同じだけの土地を持つだろう  
 他の人たちは横になって死ぬがあなたは座って死ぬのだ！」  
 王はそれを聞いて胸を傷つけ、  
 顔の前で十字を切り神に自らを託した 840  
 そして教皇と大司教はそれに気づいて、  
 彼の大小の罪を許した  
 そして聖体を彼に取らせた。  
 それから彼に全能の神の印を与えた<sup>167</sup>。  
 シャルルは見渡し彼の臣下を見た。 845  
 「バロンよ、」彼は言った、「私の想いを聞け。  
 私はこの世で十分に長く生きた、  
 400年より12年だけ短い年月を生きたのだ、  
 1時間後、私はこの物語を見ることはないだろう<sup>168</sup>  
 しかし1つのことを確かに知っておけ。 850  
 あごから足まで前面を、  
 腕にも脚にも腿にも脇腹にも  
 わたしが剣や槍で傷つけられることがないように。  
 神とその聖人たちの榮譽のもとに立派な者であれ、  
 そうすれば来世でかように大きな褒賞を受けられるのだから。」 855  
 彼は自分の顔の前で自分自身に十字を切った、  
 口を開き立派に言った。  
 「あなたに、ギョーム殿、あなたにルイを任せる。」  
 ギョームはそれを聞き大いなる神に誓った。  
 「私は物心ついた時から 860  
 わが聖人にかけて嘘を言ったことはありませんし  
 生きている間中嘘を言うことはないでしょう。」

<sup>166</sup> 原文 *un çativo roys çativo* を Tutino は *cattivo* と訳している。注 118 (Aimer le chaitif についての注) 参照。あるいは「悪い王」「貧しい王」と訳すべきか。しかし3行前では「良き王」と呼んでいる。

<sup>167</sup> Tutino は *dargli l'estrema unzione* と訳している、つまり臨終の塗油の秘蹟。

<sup>168</sup> 原文 *un'ora no me vite ste geste avante* Tutino は *e questa storia mi vedrà ancora per poco* と訳しているが、ここでは *non mi vite* を *non mi vedo 'je ne vois pas'* とし、*ste geste* を目的語と解釈した。

王はそれを聞き、彼に優しく口づけした。  
 ギョームは屈み、彼に剣を帯びさせ  
 そして光り輝く2つの拍車を履かせ 865  
 そして光り輝く冠をしっかりと乗せた  
 そして王は墓室に入る、悲痛な様子で。  
 彼の玉座は白い象牙で出来ていた。  
 その上にフランスの王は座り  
 彼の白い手で顔の前に十字を切り、 870  
 右足を左足の上に置き、  
 左手を顎の下に置いた<sup>169</sup>。  
 魂が離れ、それ以上止まることはなく、  
 天使ケルビムがその両腕にその魂を取り、  
 甘美な歌を歌いつつ天へと連れて行く、 875  
 彼をかくも待ち望んでいた神の宮廷へ<sup>170</sup>。  
 ろうそくと燭台はずっと燃え続ける、  
 輝く人たちは天へと行く。  
 その日祈り、悔悟しつつミサを聞く人は  
 神がその人をフランスの王への愛ゆえに赦すだろう。 880  
 啞の者が言葉を得て、聾の者が聞くようになるだろう。  
 そしてギョームは大きな宮殿へと帰る<sup>171</sup>。  
 遺言は終わった、これ以上進むことはない  
 神が、聖なる偉大なる方があなた方を祝福してくれますように。

<sup>169</sup> Tutino はこの行 (872) を訳出していない。中世の図像では座った姿は神と天使、王、教皇、司教、裁判官にしか与えられない (François Garnier, *Le Langage de l'image au Moyen Âge*. vol. 1 *Signification et symbolique*, vol. 2, *Grammaire des gestes*, Le Léopard d'or, 1982-1989, vol. 1, p. 113)。また足を組んだ姿は裁判官や皇帝に用いられる (Garnier, *op. cit.*, vol. 1, p. 229, vol. 2, pp. 158-159)。手で頭を支える動作は苦悩を表す (*ibid.*, vol. 1, pp. 181-184, vol. 2, pp. 118-120)。Cf. Giannini et Palumbo (*op. cit.*, pp. 78-79)。

<sup>170</sup> 原文 *in la corte de Dio che l'à tendù cotant tendù* が *tendre* の過去分詞であれば *attendre* の意味ではないのだが、*atendu* の語頭音消失と解釈した。あるいは *l'atendu* という解釈も可能か。

<sup>171</sup> 原文 *Lora tornes Guielmo su li palés grant* Tornes について、Contini と Meneghetti は *tornés* と読んでギョームへの語り手からの命令と解釈し、882 行目と 883 行目の順番を変えて、834 行目もギョームへの呼びかけとしている (その理由は説明されていない)。Tutino は *-s* を再帰代名詞ととり順番は変えない Cornagliotti (*op. cit.*, p. 192) の読みを採用している。Tutino も確認しているように文頭に *lora* のような時の副詞が置かれてもトブラー＝ムッサフィアの法則 *Legge Tobler-Mussafia* (無強勢の補語人称代名詞等はフレーズの先頭に置くことはできない、という中世のロマンス語に見られる法則、Cf. Rohlfs, *op. cit.*, §469) は必ずしも適用されない。

本ガ終ハリ我々ハ救ヒ主ニ感謝スル<sup>キリスト</sup>172

885

【本研究は JSPS 科研費 21J12269 および 21J11676 の助成を受けている】

※この訳は訳者 2 人が 2021 年 8 月から 2022 年 2 月にかけて行った読書会の成果を元にしている。

---

<sup>172</sup> 原文 *finito libro referamus gratiam Christo*